

取り敢えず、生き抜き
ますか

カイト改

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこぞの素晴らしい祝福の駄女神様に転生させられた主人公はアストレイを引っ提げてどこへ向かうのか。

初投稿です。アドバイスなどは大歓迎です！

ですが、お豆腐メンタルなのでお手柔らかにお願いいたします。

目次

七話	六話	五話	四話	三話	二話	一話
97	83	64	47	31	16	1

一話

どうもよくある神様転生で転生しました神崎蒼（かんざき そう）と申します。なんかトラックに轢かれそうになってる子供を無事救助して、テンプレ回避してやったぜドヤアってしてたら通り魔に土手っ腹刺されて、そいつをぶちのめして勝利のポーズ！（ヤッターマン感）してたら上から鉄骨が降って来てピタゴラスイッチ的な感じで死にました。

んで、目え覚ましたらどつかの素晴らしい祝福の駄女神がいて、「アンタを転生させるから特典を選びなさい!!？」って上から目線（神様と人間だから当然？）で言われまして。取り敢えず、ISって言うパワードスーツが飛び回る女尊男卑なヤベー世界って言われたんで、アストレイ・レッドフレームを持って無事転生しました・・・目を覚ましたら5〜6歳のシヨタになってるわ、訳の分からん研究施設の実験台だわ、マジであの駄目神はいつかどうにかしてブン殴る!!？つと、話がずれたな。まあそこから2年ぐらいは我慢して、そこからパワードスーツとして存在してたアストレイをゲットして研究施設をぶっ壊して脱出しました。

『今日の仕事は楽だな〜』

『だなくなんせガキ2人を攫うだけでいいからな』

そこから7年が経ったんだけど、色々とやらかしてくれたわあの駄女神。そもそもISには女性しか乗れなくて、その技術もビーム兵器がめっちゃ珍しいってか始まりのIS以外は持ってないからどこの国の技術だ!?!? ってなりました、はい・・・そのISのコアつてのが世界に467個しか存在してないらしくて、世界のあつちこつちで出沒してるアイツはなんなんだってことで世界的に指名手配されることになりました・・・

『アンタら、ガキ共はまだ寝てんのかい?』

『あ、ボス。はいぐつすりねてますよ』

『そいつらはドクターシノノとブリュンヒルデの妹だ逃すんじゃないよ!』

『り、了解です!でもその2人の妹ってことは俺達は大丈夫なんですかい?』

『雇い主からISに対抗できる兵器つてのを借りてるからね、心配することはないよ!』

『了解です!』

ほーん、ISに対抗できる兵器か・・・どんなんだろ?もうちよつと様子を見るか。

あ、指名手配されたことよって俺は世界各地に拠点を作つて飛び回りながらアストレイ用の装備を造つたり、違法施設をぶつ潰したりしてきて、たまたまドイツの廃工場に擬装した拠点にヴォワチュール・リュミエールを搭載した換装ユニットを取りに来

たら、なんか誘拐現場に遭遇したとです。どうしよう、これ・・・

『なるほどなくどうりでボスが上機嫌なわけだ』

『壊れない程度だったら遊んでいいって話だしな』

む、ちよつとやばいかもしれん。前世で国民を守る国家公務員な仕事をしてた身としては見過ごせんな。ちなみに今はアストレイ・ゴールドフレーム天ミナをモチーフとしたユニット、ステルスフレームのミラーージュコロイド・ステルスで透明化してこいつらの会話を堂々と聞いている訳なのです。つてかこれ音は消せないから動くに動けんのです。

『お、起きたな！どつちがいい？』

『そうだな・・・俺はこっちのサムライガールかな』

『りょーかい！』

おうふ・・・とうとう恐れてた事態が・・・最悪この2人には黙ってもらうか・・・こういうのをぶつ殺すのに抵抗とかはもうないけど、今持つてる武装が実弾ばつかだからTHE☆スプラッタ確定だからなく下手にこの2人にトラウマを植え付けるわけにもいかんしな・・・あ、投げればいいのか。

ではでは秒殺クッキング開始

まず、アホ2人の首根っこを掴んで持ち上げます。

『な、なんだ!?? 誰かに捕まれてる!??』

『なんなんだ一体!??』

「ヒツ!??」

暴れる2人の首を握り潰さないように気をつけながら、海の見える窓へと向きます。この時、目を覚ましたら唐突の怪奇現象に涙目になって抱き合っている美少女2人に思わずステルスを切りそうになりますが、情報が漏れると面倒なので我慢しましょう。

さして、準備が整ったので思いつきり腕を振りかぶり、地面にクレーターを作りながら踏み込み、ご唱和ください!せくの、

星に、なあれええええつ!!?

『ギヤアアアアアアアアツ!?!?』

さて、あとはどっかに行った女ボスをしばいて終わりですね。えっと、レーダーに反応はつと・・・

「あ、あの!」

ん?なんでこつちをみて・・・あ、音は消せないってさつき自分で言ってたじゃん・・・

「お、おい一夏、大丈夫なのか?」

「大丈夫だよ箒。だって私達のこと助けてくれたもん」

いや、そんだけで大丈夫とは思わんですが・・・

「どなたかは知りませんが助けてくれてありがとうございます！姿を見せないってことは何か事情があるんですね？誰にも言わないので安心して下さい！ほら、箒も！」

「えっと、その、ありがとうございます」

おお、そんな深々と頭を下げられるとなんか居心地が悪いんだが・・・っていうかこの一夏って呼ばれてる子、なんとなくだけでも小説とかだったら絶対主人公だろ。なんか、こう、無条件でこつちのことを信じてくれて、悪意を持って近づいてもこつちが罪悪感で死にたくなる系の。

うくん、このまま放置すんのもなんか嫌だし、ちよつとばかりお節介でもかけますかね。IS作った人と世界最強の妹だったらこんなこともあるだろうしな。えっと、ボイスチエンジャー起動つと。

『一夏さんと箒さんでしたか？』

「は、はい！織斑一夏です！」

『手を出しなさい』

「えっと、これは？」

『発信機です。もしまたこのようなことがあつて、すぐに救助が望めない時に押しなさい。私が駆けつけましょう。唯の気まぐれです、信じる信じないも自由です』

「ありがとうございます！」

うわゝこの疑いのない守りたくなるこの笑顔。前世では出会わなかったタイプの間だなあ・・・ん？広域リーダーに反応、高速で接近する熱源体1つが接近中・・・ふむ、もしかしなくてもしものこの博士か世界最強だろうな。えっと、ネットからの情報・・・

”織斑千冬、決勝にて相手を瞬殺した後、ドイツ軍からの情報で妹の救出に急行!!?”
 ……いや、軍と一緒に救出に来いよ・・・人質に取られたらどうすんだよ・・・まあ、結果オーライでいいか。

『ブリュンヒルデが貴女達の救助に向かって来ているようです。』

「本当ですか!!? お姉ちゃんが!!?」

「ちなみに大会はどうなったんですか?」

『ブリュンヒルデが対戦相手を瞬殺したようですね。対戦が始まった直後に貴女達が誘拐された情報が伝わったようです』

「そうなんですか・・・」

うゝん、なんか作為的なものを感じるなあ。あ、YA☆RA☆KA☆SI☆TA
 『おい、お前ら、食べ物も買って来たぞって、はあつ!!?』

女ボスが普通にドアから参戦、かゝらゝのゝ

「無事か、一夏、箒い!!?」

世界最強が壁をぶち破ってダイナミック参戦！

って、大乱闘が始まるかと思えば、女ボスさん秒殺かよ・・・ていうかいきてる？頭ブン殴られてゴギツつていうか、ボキッ、みたいな人から鳴つちやいけないような音がしましたけど？

ー生命反応あり

あ、よかった生きてた。さて、解決したっぽいし逃げるとしますかな。ユニットは後でまた取りに来ればいいし。にしても俺、こんな馬鹿でかいコンテナ置いてたっけ？

「お前の雇い主は誰だ！」

『言うわけないだろ！来い!!?』

うわく女ボスさんなんか不穏なこと言って気絶させられたぞおい・・・

ーコンテナ内部より熱源体を感じ・数4

わお、もしかして俺フラグ建ててた？コンテナをぶつ壊して現れたのは・・・

『なんでやねん』

どーしてSEEDのストライク以外のGAT-X4機が出てくるんですかねえ!!?俺がこの世界に転生した影響ですか!!??

「ツ!!?一夏、箒、私から離れるなよ!!?」

ふむ・・・流石に2人を庇いながらは世界最強と言えど戦えんか。しゃーないなーもー

10秒後にミラージュコロイド・ステルスを停止、主ジェネレーターを待機から戦闘へ出力上昇、各武装の安全装置解除、サブジェネレーターはステルスからミラージュコロイド・ディテクターへ切り替え・・・完了。

さて、戦闘開始だ。

llllllllside out

『ブリュンヒルデ、2人を連れてここから逃げなさい!』

「なっ!?」

織斑千冬が振り向くと、ちょうど何もなかった筈の場所から滲み出るようにして赤いフレームをベースに白と黒の装甲と右腕と背中への釣り針を鏡合わせにしたかのような武装が特徴的な全身装甲型のIS?が現れた。世界各地からの報告とは見た目が少し違うが、関節部分が赤いことや、頭部の特徴的なV字の角などから《スカイゲイザー》であることがわかる。(ちなみにこの名前は、各地で見られた時に空を見上げていることが多かったためである)

「何が目的だ!?」

『問答をしている場合ですか?コイツらとは個人的に因縁があるだけです』

「・・・任せるぞ」

『貴方達の追跡くら逃れ続けているのは伊達ではありませんよ』

織斑千冬は2人を脇に抱えて飛び去った。織斑一夏が何やら叫んでいたようだがすでに戦闘を開始していたため、聞こえることはなかった。

『さあつて、生命反応なし、ハンドガンによる損傷が認められないことからPS装甲は搭載していると仮定、現在使用可能武装・・・トリケロス改式、ツカノツルギ、マガノイクタチ、マガノシラホコ、イーゲルシユテルン、グラップシールド、ハンドガン一丁から、ビーム兵器を一個ぐらいは積んどくべきだったかな？か、ウイングソー』

四方から飛んでくるビームやらランサーダートやらインパルス砲やらを余裕で避けながら分析を行う蒼。PS（フェイズシフト）装甲とは一定の電圧の電流を流す事によつて相転移する特殊な金属でできた装甲である。ぶっちゃけると、実体系の攻撃で損傷しないめっちゃエネルギーを食う便利装甲であると思つておいて欲しい。ちなみにアストレイは発泡金属という”当たらなければどうと言うことはない!”を地で行く軽量装甲を採用している。

『まあ、どこの公式チートと違つてフレームは普通だからやりようはあるか』

そう呟くと、動きが変わる。回避に専念していたのから、腰部横のレイピア型の実体剣であるツカノツルギを抜刀、ビームサーベルを発振して突っ込んできたデュエル頭部のメインセンサーに突き刺し、そのまま頭をもぎ取る。

『まずは一つ』

そのまま右腕のトリケロス改式から電磁加速し、装甲の貫徹に特化したランサーダートを首に撃ち込み、内側から真つ二つにして撃破。続いて両肩のミサイルポッドを開いたバスターに対してランサーダートを発射、誘爆させて両腕を失ったところにトツカノツルギを突っ込み、そのまま胸部へ振り抜いて破壊。

『二つ』

ローミラージユコロイド・デテクターより、8時の方向距離3

全てのセンサーから消えるトンデモ技術を使用したブリッツを見つけることができ、これまたトンデモ技術で探知すると、トリケロス改式に収納されていたハンドガンで射撃を行えば、頭部と胸部を撃ちぬかれたブリッツが現れる。

『三つ……って、あれ？ イージスはどこ行った？』

周辺を探索するが、どこにもいない。ちなみに、イージスは同時期に開発された5機のGAT-Xシリーズの中で唯一の変形機構を持っており、その姿は今までの可変モビルスーツとは一線を画する異様さを持つ。

『どこぞの勇者王みたいに壊れながら変形してたとか？』

と言いながら、探索を続けるが反応はなく蒼は諦めた。ちなみに彼らの言う勇者王は、勇気という言葉で大抵のことはなんとかなる敵を光に変える胸にライオンの頭が付

いたスーパーロボットの事である。

『さて、逃げるのでしょうかね。主ジェネレーター待機へサブをステルスへ切り替え…あの姉妹を覗いてから帰るかな』

と、極力駆動音を消しながら廃工場の外へと歩いていく。

所変わってこちらは脱出した織斑千冬たち。その周囲にはようやく追いついたドイツ軍が展開しており、織斑千冬は軍人の一人と話をしていた。

「では、今廃工場の中にはもうスカイゲイザーはいないかと？」

『はい。ここからの探査のみですが、各種のセンサーにはスカイゲイザーに倒された3機の反応以外は検知されていません』

「そうか・・・ありがとう」

3機、という言葉にどことなく違和感を覚えながらも織斑千冬は未だに廃工場を眺めている2人の下へ向かった。

「あ、お姉ちゃん」

「軍人達曰くスカイゲイザーは既にどこかへと去ったのではないかとの話だったよ」

「そつかりちゃんとお礼を言いたかったな」

「まあ、いつか偶然会えるかも知れんしな」

「うんー！」

織斑一夏が輝くような笑顔を浮かべ、それを見た織斑千冬と篠ノ之箒がようやく表情を緩めた時、唐突に先程聞いたマシンボイスが響いた。

『織斑千冬！2人を守りなさい！！？』

「ツッ？？」

声に反応した織斑千冬は瞬時にIS〈暮桜〉を展開し、2人に覆い被さるようにして抱き締めた。

「ーチツッ！今からじゃ主ジエネは間に合わんか、トリケロス改式をパージ、サブと左腕を直結、サブを強制最大出力へ！」

「ー危険??サブジエネレーター及び左腕部に重大なエラー発生の可能性大、両ユニットの制御が不能になり、爆発の危険性あり??」

「ーやかましい！元はと言えば、俺が原因の可能性があるし、女の子3人を助ける代償が腕一本なら安いもんだろ！」

織斑千冬にだけ聞こえてきた男の声は、何かの拍子に繋がったのか目の前にいつのまにか現れたスカイゲイザーから聞こえてきているようだった。

背中のユニットから伸びたケーブルは引き絞られた左腕に接続され、時折火花が散っている。その拳の延長線にはどこかへと消えていた前方のアームを展開し、中央のエネ

ルギー砲を晒したイージスが突貫してきていた。スカイゲイザーの左の籠手部分にエネルギーが蓄積していつているのか、徐々に光が強くなっていく。

ー接触まで・・・3・2・1・今

ー喰らって果てろ、煌雷拳!!?

突き出された拳は真つ直ぐにイージスのエネルギー砲の中心をぶち抜き、蓄積したエネルギーを全開放した。次の瞬間、イージスの機体全体に激しい電流が走り、その動きを止めた。そしてスカイゲイザーは背中と左腕の各部から上がる火花と赤熱化しているのを気にした風もなく3人の方へと向き直った。

『・・・皆さん、怪我はありませんか?』

「ああ、・・・って、大丈夫なのかその、色々!」

『なんのことでしよう?』

はて?と首を傾げるスカイゲイザーに対し、通信が聞こえていたと、自分の腕を犠牲にしようとしていたことが聞こえていたと、叫ぼうとした織斑千冬はなんのためにスカイゲイザーが惚けているのかに気づいた。

(一夏と箒のためか)

2人が自分達を庇ったことで自身の腕を犠牲にしようとしたと気づかれないように

しているのだと。元のフレームが赤なのでわかりづらいが、湯気が上がっているのがわかる。

『皆さん無事のように何より。申し訳ないがここで皆さんに捕まる訳にはいかないの
で、では!』

そう言うのと、煙幕をはった。それが消えるとスカイゲイザーはそこにいなかった。

『あ、1つだけ。私の名前はアストレイです。以後お見知りおきを』

スカイゲイザー、いやアストレイはそれだけ言葉を残した。

この後、織斑一夏、篠ノ之箒の両名は無事に帰宅した。

世界各国では、スカイゲイザーではなく、アストレイと自ら名乗った謎のISを探したが、それまではポツポツとあった報告は。パツタリと途絶えた。

そして、物語は2年後へと加速する。

「・・・一夏」

「箒。IS操縦者として頑張ればきつとアストレイさんに会えるよね」

「そうだな。共に頑張ろう!」

「うん!」

二話

どうもくなんやかんやあつて日本の倉持技研つてところに就職しました神崎 蒼です。ドイツの件の時に使い物にならなくなつて、とうとう小さく爆発し始めた左腕をグラップシールドで引きちぎつて海へ、ピョーン！つてした訳なんです、左腕引きちぎつたのと冷却が追いつかなくて顔と上半身の左側に火傷を負うレベルの熱が予想以上の激痛でして途中で気絶してしまいました、気づいたら湘南の浜辺に流れついてました。その時に巻紙礼子つて人に発見されて、色々とお世話になつて最終的には巻紙さんの勤務先の倉持技研に就職させて貰う事になりました。

「お〜い、蒼！簪の嬢ちゃんが来たぞ〜！」

「了解です、おやつさん！」

アストレイを修理しながら、義手を作つたり、ISのシステムの改善案の提案とか色々やつてたらいつの間にか代表候補生とやらのISの建造担当者になりました。

「お待たせ、簪さん」

「いえ、急に来てすみません」

「全然構わないよ。ちようど休憩のタイミングだったからね」

んで、この青髪眼鏡っ娘が件の楯無 簪さんですな。いつもはのほくんとした子が一緒なんだけど、今日は一人のようだな。

「今日はどういったご用件で？」

「あの・・・武装の案を持って来たので見て欲しいです」

「了解！」

ちなみに、この子はオタクである。ヒーローとかそういったものが好きだから話が合うんですよこれが。この子の担当者になったのはそれもあるかも知れんな。

えっと・・・ふむ、6×8、計48発のマルチロケットオン仕様のミサイルが主武装の高機動型か。近接武器に薙刀、後は荷電粒子砲2門か・・・うーん

「どう・・・ですか？」

「そうだね・・・発想はいいけど、武装数が心許ないかな」

「そう・・・ですか？」

「うん。マルチロケットオンはいい発想だけど、これだけだと対処された時に武器が二つしかないのは、圧倒的に火力不足になると思うな」

「例えば、どんなのがいいんですか？」

「そうだね・・・簪さん、お馬火力と内蔵武器にロマンを感じない？」

「その話、詳しくお願いします」

うし、喰いついた！ふはは！原型消滅レベルで魔改造してやるぜ!!？Zとサイコザクとフルアーマーガンダムと・・・（もちろん簪さんの意思を優先しますよ？はい）

「あ、マルチロツクオンシテムは俺が作つとくから安心してね」

「え!??できるんですか?」

「ふふん、勉強してますから」

「これでいいの?」

「はい！ロマンと実用性を兼ね備えたこの打鉄二式改でお願いします!」

「りよーかい！完成、楽しみにしててね」

「もちろんです!」

めちやくちやいい笑顔で帰ってったな

いい笑顔といえば、前に言ってたウサ耳巨乳女こと篠ノ之東なんだけど、政府のシテムをクラッキングして戸籍とか擬装したのから辿ってきたのか、俺の所に来たんだわ。なんで自分を追うのか聞いてみたら、アストレイに興味があったそうで。まあ、俺としてはどうでも良かったんだけど、思わずISで何がしたいのか聞いてしまいました・・・アストレイは兵器なんだけど、宇宙に行くためのISに必要なの?とか色々言っ

た結果……

「やつほー、そーくん」

「どもです」

「むー、さっきの子の時とテンションが違うぞ！ 束さんもあんな感じで反応して欲しいなあ〜」

「へいへい」

端的に言ってしまったまあ、めっちゃくちや懐かれました。なんか、ISを兵器として見ない人間は初めてで、世間では天才として敬遠されてたけど普通に接して貰えたこととか、妹とその親友を守ってくれてありがとうとか、泣きながら言ってきた、頑張った慰めたらウサ耳じゃなくて犬耳が見えるレベルで懐かれました。なんとなく可愛く思えるから別にいいけどね。

皆さんは何が好きですか？ 私は可愛かったらなんでもありです。

「んで、どうした？ 宇宙に行くための技術は知る限り伝えたが？」

「むー、何かないと会いに来ちゃダメなの？」

「いや、構わんがな……」

「ちゃんと防犯カメラのハッキングはしてあるよ？」

「うん、文句無し！」

「さっすがそーくん！話が分かる〜」

抱きつくのはやめてくれませんかねえ・・・男としては色々嬉しいが。あ、コイツまた不摂生な生活してやがんな？目の下の隈がすげえし、肌もガツサガサになってるし。これはキチンと世話をせねば（唐突の父性）!!?・・・そこ！ちよつと反応しそうなのを頑張つて誤魔化そうとするとか言わない!!?」

「んじゃ、行くぞ」

「ほえ、どこに?」

「俺の家」

「はっ!!?そーくんもやつと束さんの魅力に気がついてくれたんだね!」

「アンタが可愛いのは知つとるわ。まーた、研究ばつかしてんだろ?今日一日は研究できると思うなよ」

「はーい・・・えへへ、可愛いつて言ってくれた・・・」

なんかぶつぶつ言ってるが、静かになつたし放置でいいとしますかね。

あ、ちなみにアストレイのことについては、そこら辺の変な工場とかをぶつ潰してたら見つけたパワードスーツつて説明してある。まあ、ISみたいに色々と便利な機能はないから簡単に納得して貰えたわ。出自についても気づいたらどつかの研究施設で、！それまでの記憶がないってことにしてある。さてと、この背中にくつついたまんまのお

姫様のお世話を頑張りますかね。

~~~~~

「あゝ、美味しかった〜」

「お粗末様、と言いたいところだが、軽く7―8人前は作ったつもりだったんだが、その細い体のどこにはいるんだ？」

「むふふ〜知りたい？」

「あー、やっぱいいわ」

ふむ、なんやかんやで世界から指名手配されてるコイツがたまに訪ねてくる以外はのほほんと暮らせてるな。あの二人からも救助信号が送られてくることもないし、向こうも平和に暮らしてんのかねえ？別に元自衛官だから、ある程度なら戦うことが出来るとしても積極的に自分から戦いに行こうとは思わんしな。そもそもアストレイを引っ提げて来たのも駄女神がパスワードスーツの飛び交うガンダムみたいな世界だって聞いたからだもんなく何故かいたGAT-Xもあれ以来出てきてねえし、大嘘つきやがったよなあ駄女神。

生きた状態で駄女神をブン殴る方法を目標にしながら平和に生きていこうと思う今日この頃です。

「ねえーそーくん、一つ相談があるのですが」

「ん？今日の晩飯か、気が早いな」

「ちつがくう!!？」

「じゃあなんだ、変な猫撫で声出して」

「えっと、来年の四月から箒ちゃんといつちちゃんが国立のIS学園に入学することになりました・・・」

日本がどこぞの大国に強制されて作った孤島の学園だっけ？あー、有名人の妹さんだからか。纏めて監視できた方が便利だから入学させられたって方が正しいのかね

「ちなみに二人ともISに乗るようになれば、もう一回そーくんことアストレイに会えるかも知れないって張り切ってるらしいよ」

・・・マジで言ってるのか、それ。

「うわ、そーくんなんか凄い顔になってるよ？」

「例えば？」

「うーん、なんていうか、物凄く格好良く女の子を助けて、名乗る程の者じゃありません。って言った次の日に実は同じ職場で働いてたことが発覚した、みたいなの？」

「まあ、そんなところか。」

端的に言えば、一生顔を合わせたくないのですが。あ、でも向こうは俺だって知らないし、コイツに黙って貰えればいいのか？いや、まあいい！なんか俺がIS学園に行く

ことになってる気がするんだが？一応話は聞くか。

「えつとね、箒ちゃんといつちゃんを守ってあげて欲しいの」

「守る？お前と世界最強が居れば大丈夫なはずだろ？」

「・・・聞いてくれる？」

「—————」

「・・・マジで？」

「うん・・・」

話によると、織斑一夏には一つ上の兄がいるらしいんだが、所謂天才という奴らしい。なんでもそつなくこなし、人当たりもいい。だが、何かと織斑一夏を目の敵にしているらしい。自らの手で攻撃することはなく、周りの人間をうまくけしかけていじめを行なっているそう。

「篠ノ之箒の他に味方になれるようなのはいないのか？」

「中国人の子がいたんだけど家庭の都合で帰っちゃってて、東さんがぶつ殺そうとしたら私は大丈夫だからって言われちゃったし、ちーちゃんの前では表だったことはしないから頑張つて家に帰ろうとははしてるみたいなんだけど、巧妙に隠してるみたいだし、注意しても変わらないみたいで・・・」

「なるほど・・・」

「I S学園に入学すればそもそもそいつに合わなくて良くなるだろうな．．．ん？」

「なあ、I Sって女性しか扱えないんだよな？」

「私にもなんでもかわからないんだけどね」

「つてことは．．．」

「あれ？そーくんテレビ見てないの？知ってるから話を進めるとばかり．．．」

「国立だろうが、狙われるだろうから俺に護衛をしてほしいんだと思つてた．．．つてか、こんな話を切り出した時点で察するべきだったな」

「そうだ、そうだ！反省しろ〜」

「．．．あ？」

「ごめんちやい」

「面倒くせえなくその．．．ゴミ君が生徒として居るなら織斑千冬が庇えば逆にいじめの原因になると．．．つてか、肉親から嫌がらせを受け続けてよくあんな優しい子に育つたな。俺は壊れたのに。」

あ．．．

「俺が超長距離からドタマブチ抜いたら万事解決？」

「でも、それだとリーダーに引つかからずに狙撃できる技術を持つてる所なんて限られてるからすぐにそー君ことアストレイに行き着くと思つよ？」

むう・・・しゃーないか・・・

「わーっつたよ。行つてやるよI S学園によ」

「ほんと?!? ありがとうそーくん!!? お礼は私のsy・・・」

「最後まで言わせんぞ! 取り敢えず、アストレイの擬装とかするから手伝つてくれ」

「まっかせて!!?」

平和に生きていこうとか、決意した矢先にトラブルが転がりこんでくるとは・・・絶  
対あの駄女神俺のこと嫌いだろ・・・

気を取り直して、アストレイの擬装をどうしようかね〜マーズジャケットを基点にするかな。見た目ザフト系モビルスーツだし、後は実体弾系で固めておいとぎやそうそうバレルことはないだろ。あ、I SのPICも要るな。アストレイは基本スラスターで無理矢理空に飛ばしてるわけだし、あんまI Sの技術は使いたくないけど、俺のちつちえプライドで他の人間を危険な目に合わせたくないしな。

「あ、世間にもう一人の男性操縦者つてことで発表するからそのつもりでね〜」

「うっそだろお前・・・」

l l l l l s i d e o u t

『二人目の男性IS操縦者が篠ノ之束博士によつて発表されました!!?』

興奮したようにテレビに向かつて叫ぶアナウンサーの後ろには、スーツといういつになく真面目な格好の篠ノ之束と同じくスーツ姿の顔の右半分には火傷の痕がある青年こと神崎 蒼が記者会見に臨んでいた。

「ぶっ!?」

「だ、大丈夫お姉ちゃん!?」

織斑家にてビール片手にテレビを見ていた織斑千冬はそのビールを吹き出した。突然のことにオロオロする織斑一夏を尻目に携帯をとりだした。

『はい、「どういうことだ束!!?」・・・うわお、大迫力!』

「む? 誰だ貴様・・・」

開口一番、馬鹿デカイ声で怒鳴りつけたのだが、返ってきたのは男の声だった。しかも微妙に聞いたことのある声だ、具体的には2年前。

『あ、どうもくおそらく今全国に放送されているであろう記者会見に映ってます、アストレイこと神崎蒼です』

「なぜ貴様が束と一緒に居る?」

『二年前のあの事件のあと、捕まりましたね。アストレイのことを根掘り葉掘り聞かれ

まして、いつの間にかめちやくちや懐かれました。あ、ちなみに彼女は今アストレイの擬装開発でてんやわんやしてますね』

「そうか・・・」

取り敢えず冷静な声音で返事をして見たが、織斑千冬の頭の中はぐちゃぐちゃになっていた。

（待て待て！アストレイが男だったのは知っていたが、束が興味を持って、しかも懐いた!?？人嫌いかつ特に男嫌いなあの!?？明日世界が終わるんじゃないか・・・って、今はそうじゃなくて！アストレイの擬装と言っていたが、IS学園に入学するつもりか？そうでなければ発表などしないか・・・じゃあなんのために？）

『まあ、全ての国から独立した場所かつ世界最強がいると言えど、貴女達の妹を狙う存在がどういう手段を使ってくるかなんて予想がつきませんからね〜というわけで、同じ学生という身分であれば一番自然に近くで守ることができるようにとのことです』

「そうか・・・」

『あ、二人にはくれぐれも俺のことは内密にお願いします。アストレイってのがどこからかバレて更に面倒くさいのが増えるのも嫌なので』

「了解した。それと・・・お前、家族は？」

『いや〜気づいたらどっかの研究施設でしてね。そこまでの記憶が一切ないのでなんと

も。アストレイもそこら辺の施設をぶっ壊しまくってたら見つけたもんですし。』

「そうか・・・すまんな」

『いえいえ、では入学試験の時に会いましょう』

「ああ」

電話が終わり、ソファアに沈み込む織斑千冬。そこへ何かを察して台所の方へと行っていた織斑一夏が戻ってきた。手には新しいビールの缶とつまみがあった。

「今の、東さん？」

「そうだ。2人目の話をな。東曰くそんなに悪い奴ではないらしい。私達と同じで家族がいらないらしくてな。一夏が気に入れば、仲良くしてやってくれ」

「うん、わかった」

そして、思い出したのかぼつりと一言。

「あの時の礼、言い損ねたな・・・」

どこかのホテルにて。

「おい、どういふことだよ!? 男性操縦者がもう1人つて、原作には無かった筈だろ!!」

「そうなんだがな・・・もしかしたら俺達転生者の存在が影響しているのかもな」

「まあ、そいつを殺すタイミングなんてこれからあるだろしな」

「そうだな。俺はお前がハーレムを作れるように外部から協力する」

「んで、俺はお前が欲しい女を送りこむ。しっかし一夏をTSさせてハーレムを作らせないようにしてあわよくば殺そうとするのには恐れいったよ」

「まあ、原作の主人公だから下手したら百合ハーレムでも作りそうだからな。項羽の憂いは絶つておくもんだろ？このチート能力があればどうとでもなるんだ、2度目の人生を楽しんでやろうぜ」

「おうよ」

なんて話があった。片方は本来原作には存在しなかった織斑一夏の兄こと織斑秋斗。もう1人は打田圭介。神崎蒼がいうところの素晴らしい祝福の駄女神が特に何も考えずに転生させた前世性犯罪者の2人である。原作が始まる前から何かと暗躍しているようで、神崎蒼はこの2人の影響によってこの世界を崩壊させないために転生させられたのである。

・・・それについての説明は本人にはされていないようだが。

「ちゃんと仕事をしてくださいよ先輩！」

「なんで完璧最高女神の私が〜」

「元はと言えば先輩が犯罪者を転生させるからでしょ!!?」

ペナルティによつて大量の仕事の書類の中を泳ぐ駄女神が居るとかいないとか。

「ごめんなさい?????さん! 私達にはもう干渉することが出来ないのだからどうか世界のことを  
お願いします!!?!」

「ん? 駄女神に困らされてる女神様の声?」

「どーしたの、そーくん?」

「んにゃ、なんでもない」

## 三話

どうも、朝起きて顔にデイスティニーみたいな赤い線出来てて真剣にビビった神崎蒼です。寝落ちして、顔に塗装したばつかのアストレイのセンサーパーツが顔に引っ付いてました。めっちゃ顔ピリピリする〜

おやつさん達め、俺が居なくなるからって宴会を開いてくれてさ、最後は泣きながら頑張れよってさ・・・離れ辛くなるようなことはやめてくれんかねえ。未だに泣きそうだわ。

とまあ、現実逃避は置いといて周囲を見回してみましよう・・・女の子しかいませんね。視界の端に居る、えつと、・・・は無視するとして、今日はIS学園の入学式なのです！生徒会長さんがスピーチをしてんだけど、あの綺麗な青の髪の毛、どつかで見ただことあんだよなくあとめつちや目が合うんだけど、あの人も男が嫌いな方なのかね〜だとしたらお先真つ暗ですな。

あと、顔に火傷の跡があるからか周りもなんかヒソヒソとうるせえし、早く入学式終わって。帰ってどつかから嗅ぎつけたのかは知らんけど、女性権利団体？とやらがなんか家の前でピーチクパーチクうるせえから「ゼロツービッグバン」ぶちこんでやる。そ

う言えば、令和入ってからライダーキックとかが一撃必殺じゃなくなっちゃったよな。あつちこつちから蹴りまくってからトドメってスパロボじみてきたよな。ライダーキック？ おつしや勝つる！っていう風潮はどこ？

アストレイに本来なかったフレームシステムの換装方法もどつちかっていうとゼロワンを参考にして俺が追加したからなくちなみにこの世界には、ガンダム以外のスパロボは存在してたりする。

「では、あらかじめ配布してある紙に書いてある教室へ向かって下さい」

あ、やつと終わったか。視線が鬱陶しいしとつとと行くか。

——移動中——

——はつと・・・お、あつたあつた。一番乗りだな。

「きやつぱり？」

「おつと」

悲鳴と共に背中に軽い衝撃。振り返ると、入学式の時から大分印象的だった眼鏡の先生だった。簡単に言うと、ドジっ子眼鏡ロリ巨乳つてところか。教員紹介の時も何もなるところでつまづいて織斑千冬に倒れかかってたし、見ててハラハラするわ。

「山田先生、大丈夫ですか？」

「は、はい。ありがとうございます。貴方は・・・神崎蒼君ですね、・・・ど、どうして

私の名前を知っているんですか!!?」

なんで若干怯えた感じで聞いてくるんですかねー?この先生、天然属性も追加する気か?流石に傷つくんですが・・・

「今日の入学式で1年1組の担任として自己紹介されましたよね?流石に自分の担当をしてくださる先生の顔と名前ぐらいはちゃんと覚えますよ」

「あ・・・そ、そうでしたね!ごめんなさい・・・」

おお、目に見えて落ち込んでしまった・・・どうしよう・・・

「ま、まあ勘違いしてしまうこともありますよね!大丈夫ですよ!」

「そう、ですね・・・ありがとうございます!あ、呼ばれていたのを忘れてました!では神崎くん、また後でです!!?」

「はい、お疲れ様です」

よかった、取り敢えず元気になったっぽいな。うーん、やつぱ顔の傷のせいで印象が悪いかねえ・・・気にしてもしょうがないか、俺の席はく窓際が一番後ろ!よつしやラッキー♪寝よ。

「オヤスミー」

~~~~~

「起きろ」

「んぐあつ!?」

「頭が割れるう!? 何事!? 敵襲!?」

顔を上げると、なんとということでしょう。クール系の美女が私を見下ろしているではありませんか。つていうか、その出席簿で殴ったんですか? 金属系のなんかかと思っただんですが……

「神崎、自己紹介をしてみろ」

「了解」

唐突う!? まあ、学園生活するのなら必要そうだから考えてあつたからいいものをさ……なんかこの人に逆らおうつて気力が湧かないんだが……まあ、いいか。

立ち上がると、クラスメイト+ α ×2の視線が。先生もそうですけど、俺を見てもなんも出ませんよ? 左腕からワイヤーだのナイフだのお菓子だのはでますが。

「神崎蒼です。多分15歳です。好きな物は甘い物と猫と犬、嫌いな物は辛い物と自己中のドアホです。興味ない人間には反応しないのでそのつもりで。趣味は機械弄り、一応倉持技研で代表候補生のIS建造に携わってました。あ、あと顔の傷についてはほつといてください。まあ、よろしくです」

「しーん、と。なんかしくじった?」

「「きやあああああつ!!??!!??」」

ツヅク?耳があつ?音響兵器か?!

「織斑くんとは違つた無表情系イケメン!」

「顔の傷もクールさに拍車をかけていい!」

「見た感じ細マツチョだけどI Sの建造つてことは頭もいいの?」

「眼鏡のイケメンとちよつと熱血系のイケメン・・・腐腐腐、薄い本が厚くなる・・・!」

おおう、なんか背中にゾワツときたく取り敢えず今のところは受け入れられてるって
いう判断でいいのかねえ・・・あと、表情筋が仕事をしないのは、前世からだ。

つてか、こんなに煩くしてたら、織斑先生がなんらかのアクシオンを起こしそうなの
のだが・・・駄目だこりや、かんつぜんに諦めの境地つて顔になつてゐる。山田先生も苦
笑いしてるだけだし、女子校とはこんなものなんだろうか。つてか、山田先生、この爆
音の中で苦笑いだけつてある意味強者なのか?

「はあ・・・まあいい、授業を始めるぞ」

「えつ?校内案内とかはないんですか?」

「案内版をみる。もしくは教師か先輩に聞け」

わあ、合理的。早速授業かゝ束(下の名前で呼ぶようにゴリ押しされた)に教えて貰
いながら頑張つて覚えたが、どこまで通用するかだな。

もう疲れたよパトラッシュ・・・ゴールして、いいよね？

あ、また現実逃避してたわ。取り敢えず一限目を終えて、授業にはまだついていけることはわかったが、精神的疲労が尋常じゃない。もう一人の男が入学前に渡される参考書を間違えて捨てたらしくて、織斑先生にしばかれてたのは関係ないから別にどうでもいいんだけど、差を見せたいのか何なのかめっちゃ当てられたわ。しかも女子生徒からの視線がエグいのなんのって。現在進行形でケンプファー先輩みたいに視線で蜂の巣にされそう・・・どうでもいいけど、蜂がめっちゃ集まってるのとか、巣見ると気持ち悪くなるの俺だけ？

「そーそー、大丈夫？」

「ん？布仏さんか。同じクラスだったんだな」

「うん！そーそー、お菓子持つてない？」

久しぶりに顔を見たと思っただけでそれかい・・・

「ほい」

「やったー！って、今のどこから出てきたの？？」

「気にするな、ただの手品だ」

「うまうま〜」

聞いとらんのかい!?? はあ・・・まあ、いいか。えつと、こののほほんとした子が布
仏本音だ。更織簪さんの幼馴染で、前に言つてたのもこの子だ。なんか、見るだけで
ほわほわするわ〜

「ちよ、ちよつと本音!」

「こつち来て!」

「あ〜れ〜?」

あ、女子3人組に回収されてった・・・俺の数少ない癒しが・・・見た目からしてヤ
ベエつて判断されたのかな? だとしたら辛いなく人は見た目が何割とかいうけど、マジ
でそんな感じですか、ってかさつきキヤーキヤー騒いでたのは一部つて事だよな? 女
子の姦しきヤベエな。

「おい、お前!」

どつかで見たライトニングストライカーの立体化を試みたけど、レンジ120k
mつて絶対頭おかしいだろ・・・弾頭の問題か? あとレールガンだけじゃ困るから・・・
「無視すんなおらあつ!?? いだだだだつ!??」

「ん?」

なんか五月蠅いなくとか思つてて。顔を上げたら織斑・・・の腕を捻りあげてたでござ

ざる。右腕で。ふむ、前世からの癖で一定の悪意があるやつがテリトリーに入ると、無意識で身構えるんだが右腕がそれに過剰反応したっぼいな。少しレベルを下げとくかな

「すまん、癖だ」

「いつつ・・・なんなんだテメエは!!?」

うるさ!!? 胸ぐらを掴んできたので、左手を右手で取って関節をロックしながら体の外側へくすると、勝手に

「ぐあつ!!?」

吹っ飛ばす訳です。手首返しという技ですな。

おお、元々刺さってた視線の温度が一気に下がったな。女尊男卑の風潮の中で、モンドクロツゾとかいうオリンピック擬きの大会で二連覇した織斑先生はほぼ神様の扱いで、その弟も容認されてると。その反対に俺はポツと出の馬の骨つてところかな？ 束が発表してくれたからちったあ緩和されてるかと思っただが、この様子だとその意味は皆無っぼいな

「テメエ!」

「何をしている織斑、席に座れ、チャイムが鳴るぞ」

「チツ」

織斑先生ナイスウ〜!!? 面倒臭いことこの上ないからありがたいな。

「そうですね・・・神崎くん、PICの説明をして下さい」

「はい。PIC、正式名称パッシブ・イナードシャル・キャンセラーは・・・」

さつきの授業もそうなんだけど、山田先生俺のことすげー当てるけどわかんないところが無いか聞かれた時に特に、つて答えたから試してる? 答えられなかつたら織斑先生の出席簿アタックかな。まあ、今のところわかんないところはなし大丈夫かな。

—————

「ちよつとよろしくて?」

「えつと、何かな?」

「まあ、なんですのその態度は!!?」

顔を上げると、金髪チヨココロネが織斑一夏に絡んでいた。ふむ、事と次第によつては左腕のギミックを発動させる事になりそうだな。ふむふむ・・・姉や兄は有名なのに、妹のお前は誘拐されるとかどういふつもりなん!?!?と・・・そんなことを言っておるようですな。

うん、ギルティ。誘拐しに来るのをどうやって止めろつてんだよ。しかも兄弟関係ないし。

まず、左手の平を展開します。中からレールを引っ張り出して、輪ゴムを引っ掛けま

す。そこで、特製の超小型の音響爆弾を装填して機構を動かして発射準備完了。耳の近くのところに向けて発射！

「ツッ!?」

「だ、大丈夫ですか!?」

「な、なんでもありませんわ・・・覚えておきなさい!」

なんとも漂う小物臭。残弾あと何個だっけな?ちなみに今のは音によつて聞いた者の気分を悪くさせる便利グッズで、イメージとしては戦う実業家でアイアンな男の一作目のアレを弱体化させたものつて考えて貰えばいいかな。それをちよつと威力を弱めて指向性を持たせたものかな。まあ、こんな感じで織斑一夏と篠ノ之箒を陰から見守らんかな。

—————

「ちよつと、ふざけないで下さいまし!!?」

3 限目く織斑先生の授業なんだけど、クラス代表つていう面倒くさそうなやつを決めなきやいけないって言い出して、織斑兄と織斑一夏と俺が推薦されてそれで代表候補生の自分が推薦されないのはおかしい!とか金髪チョコココロネが喚き散らしている状態ですな。それに対して織斑兄が喧嘩を売っていくスタイルと。よろしい、ならば決闘だ!つてなんかあのチョコココロネ色々と頭終わってんなあ。

「では、それでいいか？織斑妹と神崎は」

「は、はい。私は・・・構わないです」

うっそお・・・俺と織斑一夏は関係なくない？休み時間に聞いたさなきとな。つか、織斑と俺（便宜上）はISに関してはどう素人だろ？なんで代表候補生と戦わせようとするかな？よくわからんな・・・

「決まりだな。ああ。昼休みに神崎と織斑妹は私の所へ来い」

「わかりました」

「了解」

装備の構成考えるか・・・

—————side out

「織斑先生、神崎と織斑です」

「来たか」

昼休み、呼び出された2人は職員室に来ていた。そして、その近くには地味に篠ノ之箒が待機していたりする。織斑先生は2人を伴って生徒指導室へと向かった。神崎が扉を閉めると、織斑先生の雰囲気が変わった。

「ごめんな一夏、あの時庇ってやれなくて」

「ううん、しょうがないよ。あれで私を庇ってたら依怙鼻頂とか言われちゃうもんね」

「一夏あ」

「ありがとう、お姉ちゃん」

抱き合う2人。お忘れだろうか？百合の花が咲き誇りそうなこの状況下で居心地が死ぬほど悪そうな男がいることを。取り敢えずこの空間から抜け出そうとするが、気がかれた。

「おい、神崎。どこへ行く？」

「・・・30分程したら戻ってきますんで」

「いや、すまん。本題に入ろう」

「こほん、と咳払いをする織斑千冬。織斑一夏？神崎がいることを思い出して真っ赤になつて縮こまっている。

「単刀直入に言うのだな・・・一夏に戦闘を教えてほしいのだ」

「マジですか？」

「ああ。私と引き分ける程度の実力があれば容易いだろう？」

「お姉ちゃんと引き分け・・・えっ、お姉ちゃんと引き分けたんですか!?!？」

「まあ、はい」

戦闘を教えてほしいと言われても変わらなかつた神崎の表情が驚いた織斑一夏の顔が近づいた事により引き攣る。ある意味快挙だったりする。

懐からSEEDサイズの青ハ口を取り出して、机の上に置いて操作をすると壁に動画が投影される。無駄に高性能だったり、織斑一夏が目をキラッキラさせているが、取り敢えずスルーして動画を再生する。

「うつそお・・・」

それは、神崎？が織斑千冬とほぼ互角に戦っている映像だった。織斑千冬の纏うIS”打鉄”が高速で一つ目の黒と青のごつい全身装甲タイプのISに突撃して行くが、それは冷静に捌かれていく。アサルトライフルと近接ブレードで全方位から織斑千冬が攻撃を仕掛けるが、神崎はほぼその場を動かずに銃剣付きのアサルトライフルでカウンターを行っていく。

「と、まあこれが神崎との入学試験だな」

「ほええ。え、でも、神崎さんもオルコットさんに決闘を申し込まれましたよね？」

「まあ、俺に関しては少々特殊な事情があつてな。たかが一週間やそこから戦闘技術が落ちるようなヤワな鍛えかたはしていないから大丈夫だ」

さつきは驚いたような発言をしていたが、実は初めて織斑千冬と邂逅した時に束と2人に頼み込まれていたりする。

「そうなんだ・・・わかった！神崎さん、お願いします!!？」

「了解した。明日の放課後から始めるのでそのつもりで」

「うんー！」

「一夏、神崎にこれからのこととかを話す必要があるから先に戻っていてくれ」

「うん、わかった！」

るんるん♪といった感じで部屋を出て行く織斑一夏を見送り、織斑千冬へと向き直る。

「取り敢えず、一夏の性格上自分から積極的に攻撃するタイプではないのでな、お前はどうする？」

「取り敢えず、重装甲化と射撃系メインに打鉄を改造しようかと。どちらかというと後方支援特化で」

「わかった。しかし、大丈夫なのか？自分の準備もあると思うのだが」

「織斑さんにも言いましたが、短期間で技術が落ちるような人生は送っていませんので」

用件が終わったのか、早速帰ろうとする神崎。その背中に織斑千冬が抱き着いた。

「・・・」

彫像並みに固まる神崎。あいも変わらず表情筋は仕事を放棄してどっかに行っているが、心の中はいきなり戦争に放り込まれた新兵並みにワニワニパニック状態だが、あまりにも見苦しいので置いておこう。

「むう、やはり何の反応もなしか」

「……どういうつもりで？」

「いやな……2年前のお礼も何も出来ず、お前も何も要求して来ないからな。なんというか、八つ当たりだ」

「いい迷惑だ……始めて顔を合わせた時にも言ったが、たまたま居たから気紛れで動いただけだから助っ人が入ってラッキーぐらいのノリでいいと言ったぞ」

「それでも、私の気がすまん」

「俺に気をつかう位なら織斑さんの状況がこれ以上悪化しないように見てあげた方がいい。あと……貴方は貴方自身が思う以上に魅力的な女性だ。こういうことは好きな人にもでもするといいい」

「なっ……」

驚きで腕の力が緩んだ隙にスルツと抜け出すと、神崎は少し早歩きで教室へと戻っていった。若干前屈みになっているのは生徒が廊下に居なかつたため織斑千冬だけが気付けたのだが、いきなり抱きつかれて慌てる姿が見れたらいいなく位のノリで抱き着いたら予想外の反撃を喰らって真っ赤になって悶えている状態では土台無理な話だった。「べ、別に動揺してなんかいないぞ！そ、そうだ、アイツは一夏と箒の命の恩人なだけであつて、み、魅力的とか言われて嬉しいとか思つてなんかないぞ！！？」

誰に向けた言い訳なのか、ブツブツと呟いているが、一つだけ。

その生い立ちのせいで恋愛面においてめちやくちや素人である、とだけ言うておこ
う。

「本当に本当だぞ!!?」

一方るんるんで帰った織斑一夏は篠ノ之箒に縋り付いていた。

「箒、どうしよう、男の人怖いのお姉ちゃんに迷惑かけなくて済むって、オツケーし
ちやったよ」

「えつと、まあ、私も千冬さんも居るんだから滅多なこととはしないハズ・・・だ」

「うう」

篠ノ之箒よ、神崎の名誉のためにも断言してあげて欲しい。ちなみに、神崎はISを
自分好みに改造できる事にしか考えが行ってなかったりする。

四話

どうも、織斑弟に絡まれまくってそろそろ無駄にイケメンな顔面にリボルビングバ
ンカーを打ち込みたい神崎蒼です。なんか、アイツの差金なのか必然なのか一部の人間
を除いて俺についてあることないこと訳の分からん噂が流れててめちやくちや居心地
悪いでござる。針の筵を体感すること2時間・・・やつと授業が終わった!!?これで帰
れる!!?ん、メールだ・・・おやつさんからか。

「もう1人の男のせいで簪の嬢ちゃんのISの建造を停止して、男のISを作れって
国から圧力がかかりやがった。嬢ちゃんはISを後は自力で作り上げるつもりらしい。
なんとか手伝ってやってくれ。」

そのボケと戦うことがあったら徹底的に頼む。by簪の嬢ちゃん親衛隊」

うわゝマジか。親衛隊があったことも驚きだけど、こりや皆さん纏めてブチ切れてん
なあ。面と向かって罵倒することはあるけど、あの人達はいない人間に対してとやかく

言うタイプじゃないからなく織斑弟のISなんざ作りたくないけど、プロとしてそんなことはできないからまたヤケ酒をしてそうだ。

取り敢えず、彼女が行くとしたら整備室つてところか。織斑先生から打鉄受領してそのまんま行くかな。

「あ！神崎くんはまだここにいましたか」

「山田先生？どうかされましたか？」

「あのですね・・・神崎くんの住む場所が決まりました」

「は？」

説明に来たムカつくオバハンがなんかグダグダ喋ってたし、織斑先生曰く部屋を準備するのに時間がくとか言ってた気がするが・・・ん？”の住む”場所？

「えっと、ここ、です」

いや、ほったて小屋やないかい!?？つくかなんで山田先生が落ち込んでるの？関係ないと思うんだが・・・

「あの、どうされました？」

「・・・聞いてくれますか？」

山田先生が話してくれたのは、正直俺は織斑先生とか布仏さんとか以外からは嫌われてるらしくて、寮に入れるのは大反対、男のくせに千冬様と引き分けた!?？冗談は酔っ

払いだけにしろ、むしろ男なんて研究施設でモルモットになっていればいい、とかなんとかめちやくちや言われてるそうなの。

取り敢えず、織斑弟が何も言われてないことに普通に殺意が湧くな。顔面にエリアルコンボ（フェイクフレイムバージョン）を折りを見てぶち込んでくれよう。

それは置いといて、にしても。

「山田先生が落ち込む理由にはならないのでは？」

「その・・・織斑先生以外は神崎くんのことを悪く言っていて、私も神崎くんのことをよく知らないのに変に怖がってしまった・・・」

「でも今は噂に流されずに一応俺をちゃんと見てくれてるんですよ？なら、そこらへんの有象無象になにかを言われても気にしないので安心してください」

「ですが、神崎くんだけこんなところなんて・・・」

「あー・・・」

織斑先生にしか言っていなかったけどこの先生なら言って良さげかな？変に噂を流すとかどっかにリークとかしなさそうだし、まあバレたとしても潰せるからいいか。

「個人的にはこっちの方が好都合なんですよ」

「え？」

「”ノア”擬装限定解除、”ロト、ヒルドルブ”起動しろ」

「・・・」

見た感じ何も無いところから現れたのが、大型多目的自走式コンテナユニット”ノア”とあんま馴染みがないかな？MSイグラーに登場するグリーンのモビルタンク”ヒルドルブ”とガンダムUCにて活躍した茶色の小型可変モビルスーツ”ロト”だ。拠点を作れなかった時期に造つたもので、ノアに関してはコイツがあれば生活とアストレイの整備ができる。あとは支援ユニットかな。

え？なんでバクウとかじゃないのかつて？ただの好みですが何か問題でも？

あ、山田先生気絶してら・・・どうしようか・・・お、都合良くベンチを発見！起きるのを待ちますかな。

「—————」

「はっ!?」

「あ、起きました?」

跳ね起きて自分の体をキョロキョロと・・・立派な物をお持ちですが、流石に気絶した人を襲おうとかいう考えはないのです。まあ、口には出さんですけど。今の状況としては、取り敢えずベンチに寝かせて俺の上着を掛けて俺自身は少し離れた所でハ口のシステムを弄つてた。多分だけど山田先生、男性恐怖症入ってるよなく下手な事したら赤い刑事なライダー2人を呼ばれるな。刑務所まで一走り付き合わされてから絶望が俺の

ゴールにされる。そんでからの研究施設で一生モルモットルート確定と。

・・・世知辛。

「まあ、色々な事情があつて寮の部屋よりかはこちらの方が都合がいいんです」

「そうだったんですね・・・この機械は、組織から逃げながら一人で作り上げたんですね?」

「そう、ですね」

あつぶねく適当に作ったカバーストーリーだったから自分の設定を忘れてたわ。そんな重い話じゃないから暗い顔をしないで欲しいんですが。チツ、もうちよい軽いストーリーを考えるべきだったか、でここまでやんなきゃいけない理由も軽いのってなんかあんのかなあ・・・

「神崎くん?」

「あ、いえ、なんでもないです」

本当になんでもないからそんな泣きそうな目で見ないでくださいく! 罪悪感が凄りんじゃ?!

「あ、織斑先生に神崎くんの案内をしたら来るように言われてたんでした! すみません、失礼します!!?」

「あ、はい」

うくん、なんか要らん勘違いが加速してる気がする？まあ取り敢えず放置だな。簪さんの所に行きますかな。

—————

「・・・神崎さんが居てくれたら・・・」

「ん、呼んだかな？」

「わひゃあつ!!?」

「おお、すまんすまん」

整備室に顔を出したら名前を呼ばれた気がしたから返事をしてみたら、めっちゃびつくりされたでござる。持ってたスパナをお手玉しながら突っ込んできたので胸でキヤツチと。「はわわ・・・」って感じどんどん顔が赤くなつていく簪さんが可愛いなとか、柔らかいしいい匂いすんなあとか現実逃避してたら背筋が凍るような殺気がガンガン飛んでくるんですけど。簪さんはパニックになりつつも全然離れようとしなし。カオス、ですな。

「はい、周りから見たら付き合ってるようにしか見えないから離れましょうか？」
「え・・・」

そんな涙目+上目使いでこっち見ないで貫つていいですかねえ!!?色々と辛いからやめてえ!!?なに??どつかで知らん内にフラグが立ったん!!?それともお兄ちゃんの

な^{!!}?どつちにしろ理性がヤベーでアンコントロールスイッチ、オン!しそうなんですけど^{!!}?あと背中に感じる視線がそろそろ物理的な能力を持ちそうですぞ。

「打鉄式式でしょ、まずは」

「あ・・・そうでした」

やっと現実に戻ってきたか。あんま追求するとそろそろ視線の主から物理的に何か飛んで来そう出しやめておこう。私は空気が読める男なのです!

「どうして、ここに?」

「ん?ああ、おやつさん達に簪さんのことをよろしく頼まれたのと、織斑先生から織斑一夏のISを作るように頼まれてね。一週間で打鉄を魔改造しなければならん訳でございますよ」

「そうなんですか・・・」

「そんなわけで9時以降はここに居るから相談があつたらいつでも聞かし、無論手伝うからなんでも言つて下さいな」

「うん!」

うん、守りたい、この笑顔。つか、なんか幼児退行してね?そういやお姉さんと仲悪いって言つてたな・・・仲が良さげなのほほんさんぐらいしか見てないから、もしかしたら寂しいのかもしれない・・・これも全部、無能なままでいなさいとかアホな

事を言ったお姉さんつてのが悪いんだ!!?

ふう、びーくーる、びーくーるつと。さて、織斑一夏用のISだが、どうするかな？取り敢えずサブアーム二本にシールドくつつけて、シールドビットをパクって付けるか。サブアーム関係と火器のトリガーはハ口に制御させるとして、織斑一夏にはある程度の回避と空の飛び方を覚えてもらうか。それなら一週間だけだったとしてもなかなかなるか。うー、アサルトライフルと・・・何がいいのかねえ。本人に聞くか。

「あの、神崎さん」

「はいよ？」

「蒼さんつて呼んでいいですか？その、わ、私も簪つて呼び捨てにして欲しいです！」

いや、唐突!!?なんか携帯見てんなるとかは思ってたけど何があった？

「構いませんが、そうすると口調砕けますが大丈夫ですか？」

「は、はい!!?ふ、不束者ですが・・・」

「使い方が違う気がするが、まあいい。これでいいか、簪？」

「はい!!?・・・えへへ、重吾さんの言う通りだった」

おやつさくん、簪に何吹き込みましたのん？なんか嬉しそうだからなんとも言えないけどやな予感がするよ!!?

・・・考えてもどうしようもないし、置いとこ。

取り敢えず要るもんはノアに送信して造つとくか。ちなみにノアにはageビルダー的なもんを作つて乗つけてあつたりする。材料さえあれば大概なんでも作れるのです！

アストレイの武装プランも出来たし、換装しますか。

「ロト、ハロ、ハンガーと武装とマーズ持つてきてー」

目え、キラキラしてる簪は置いとくか。ISと違つて量子化とかできないから輸送がめんどいのなんのつて、輸送用のアメンボ(age)擬きも造つたんだが、いかんせんデカイんだよなく鉄の男さんのマークな42みたいに分割して飛んで来るのも作つたけど、内蔵火器が装備できないとか、展開してる間は動き辛いとか、その他色々問題だらけなのです。取り敢えずパワードレッドに採用できたけど、両肩に追加でジェネレーターを装備してるからこそできる荒技でして、どうにかならんもんかねえ。

「おおう」

「あんま近くだと危ないぞー」

「・・・」

聞いてねえな。俺が気をつけときやまあ、大丈夫か。

アサルトライフル一丁と、グロックC17とリボルランチャー2門と日本刀二振りとアサルトナイフ二本と。両肩の装甲内部にライフル用の予備弾倉と給弾用のサブアー

ム二本を装備。膝の装甲内にグレラン積んで完成！あ、あの織斑弟用に弾は粘着榴弾にしといて。

「これが蒼さんのI.S.・・・」

「実際の所は全然違うんだけどな。だいたい知つてるとは思うけど、これはI.S.に対抗するためのパワードスーツだから、色々と面倒な所もあるんだぜ？」

格納場所とか、装着後の起動シークエンスとか。まあ、それしないと内蔵火器とか暴発したらまた腕とかなくなるしね。頭のイーゲルシユテルンとかになったら即死しかねないし。

「あ、っ」

「どうしたの?」

「いや、なんでもない」

普通の戦闘ならどうとでもなるけど、シールドエネルギーとかどうすっかなあ・・・こっちはエネルギー切れとかないしなあ、バッテリー製のバリア発生装置作って攻撃喰らう度に減るようにするか?ブースターは推進剤使ってるからどうにもならんのは織斑先生に相談してみるか。

はあ、面倒くせえ。

「簪、俺は織斑先生にちよつと話があるから先に上がるな。」

「うん、わかった」

「クラス代表戦には間に合うようには手伝うから夜遅くまで頑張るなよ?」

「わかってます」

「ならよし」

さて、織斑先生はどこにいるかな? お、のほほんさんを発見!

・・・知らなさそうだけど、ダメ元で聞いてみるか。

「おう、のほほんさん。織斑先生がどこに居るか知ってるか?」

「織斑先生ならいつちーの部屋に行ったよ?」

oh・・・場所分からんかつ、下手に1人で歩き周ったら逝ッテイヨ! だな確実に。

気は進まんが。

「のほほんさん、そこまで案内を頼めるか?」

「いいよー、はい!」

手を出してはい、とは? 俺の知らない言語か? まさか、まだ俺が知らないだけで、この世界には何か特殊なコミュニケーション能力が存在するのか!?? やばい、この世界の人間じゃないってバレ・・・

「おんぶー」

なさそうだな。つてか、

「その年でおんぶか？」

「むー、案内してあげないよ？」

「はあ・・・了解した」

にここにこののほんさんをおんぶして・・・あ、これはエグい。

「・・・やっぱ降りろ」

「えーなんでー？」

無自覚か？コイツ着痩せするんだなー的な感触が・・・

「そーそー？」

「なんでもない」

こんな所で理性パイセンの耐久力を試す羽目になるとは思わなかった・・・常時削られていくこの状況でどれぐらい保つのか・・・

まあ、俺が我慢したら万事解決だよな。

周りからの視線になんて負けない！

「ねえ、あれって・・・」

「うわ、早速手を出したのかしら？」

「ふん、千冬様の弟と違って寮にも入れて貰えないクズが」

・・・もう我慢出来なさそうだよ（即堕ち2コマ風）

いや、俺についてなら聞き流せるんだけど、のほほんさんのことも貶してるんだよなあ・・・試作段階のローエングリンランチャーの的になつてもらおうかな？命の保障はせんが。

「ここだよ」織斑先生は寮長で〜いつち〜としののんはその隣〜私とかんちゃんはその反対側〜」

「なんの役にも立たん情報をどうも」

「いえいえ〜」

いや、皮肉を言ったんだがな。分かつてなさそうだな。のほほんさんは俺の背中から飛び降りると、そのまんまふらふらと部屋に入つていった。

自由か。

取り敢えず寮長室をノックしようとして右手を挙げたタイミングでドアがいきなり外開きで開いた。

「もう、お姉ちゃんのシスコン！」

「あ・・・」

ダブルオーの整備用ユニットの頭に接続された青ハロはそんな音声を流しながら、脚部に搭載されたローラーで神崎へ突撃。

悲鳴すら上げられずにドアごと吹っ飛ばされた神崎の左腕からドアを外して飛び出てきたアームやらなんやらが一瞬で修復。

メインアームからワイヤーローが飛び出して神崎の肩を掴み、どこかへ引きずっていった。

一瞬の早技で悲鳴をあげることなく呆然としていた2人の前に白ハロとピンクハロが転がって来た。白ハロの目が光り、ホロディスプレイが現れテキストが打ち込まれていく。

『主の無礼、誠に申し訳ございませんでした。先程までの記憶は物理的に消去しておきますのでご安心ください。』

「え、えつと君は？」

『申し遅れました。私達は独立型多目的サポートロボット、通称ハロです。貴方達のサポートをするために主によって新規で開発されたユニットです。』

「そ、そっか。取り敢えず中に入ろっか」

『失礼します』

裸にタオル装備な美少女と白とピンクの丸い物体が会話をしているというアホみた

いな状況をようやく自覚したのか部屋の中へと誘う。転がって中にハロが入ると、赤い顔の織斑千冬がまだ立っている。

「お姉ちゃん?・・・立ったまんま気絶しちゃってる・・・」

『ピンクがベッドへと運んでおきます。』

「うん、お願いね」

そんな会話をしている後ろでピンクハロの4つの円形部位が展開、アームと足になり、見た目に合わない出力で織斑千冬を連れていった。気絶する大人が多くないかこの世界。

一方織斑一夏と白ハロは机を間に挟んで会話?をしている。

『まず、私達は主に作られました完全に独立したユニットとなっているので、盗聴・盗撮・その他プライバシーが侵害されるようなことがない事を前提に何か質問はありますか?』

「うーん、じゃあ私達のサポートって言ってたけど、それはISに関してだけなの?」

『家事からISの整備まで、大概のことはできます。が、あまりに私達に頼り切りになる場合はお尻を引つ叩かせていただきます。』

「あはは、了解しました。これからよろしくね。シロちゃん」

『シロ、とは?』

「うん、貴方の名前。ハロって言うのはいっぱいあるんでしよう？だから。」

『・・・了解しました。私の名前はシロです。改めてよろしくお願いします』

和む光景ではあるが、このハロは一体一体がユニットを装備すれば単独でISさえも退けることのできるチートスペックを誇っていたりする。しかも、独立しているので自分の作った者に対しても情け容赦無かつたりする。

『ハヤク、ワスレロ！』

「ちよっ、待っ、ぎゃああああああっ!?!?!?」

明日神崎は生きているのだろうか・・・

五話

ドームも、昨日本能との戦いを制した後の記憶が全くない神崎蒼です。思い出そうとする度に頭痛が走るんだけど、ハロとかのログを見ても一切の記録が残ってなくて割と怖いでござる。織斑先生は目が合うともものすごい勢いで顔を逸らすし、織斑一夏は露骨に俺を避けてるし・・・なんかラツキースケベでもやらかした？けど、そんなことしたら織斑先生&どっかから見てる天災（誤字ではない）から制裁喰らって命はないだろうな。

取り敢えず、俺がなんかやらかしたのは確実だろうし普通に接して貰えるまで静かにしていようか。

「あの、神崎さん」

「・・・はい？」

えっと、早速織斑一夏がきたんだが。足元には白ハロ・・・俺渡したつけ？いや、独立稼働型だから勝手に行ったのか。

「シロちゃんと話し合って自分が得意なことと希望を書き出してみました。これを参考にして作って欲しいです」

「分かりました」

ルーズリーフを受け取って流し読みつと。ふむ、防御力重視の射撃特化型ね。両肩にシールドをくつつけて背中にキャノンか。俺がある程度考えてたのと似通ってるからいけるな。

「放課後の予定は？無ければアリーナで練習を始めていきたいと思うのですが。」

「は、はい、それで構いません。でも・・・」

「基本的な飛行と機動ぐらいしかやらないので安心して下さい」

「わかりました」

ふう、口調変えて喋るのは疲れるな。

さて、今日も今日とて針の筵タイムな1日の始まりでございます。

――さあ、(時間を)振り切るぜ――

「では、借りてきた打鉄で早速練習していきましようか」

「はい」

さて、篠ノ之箒の視線が突き刺さるなか、特訓の開始でございます。居心地わる。メニューとしては、歩くのと浮かぶことだな今日は。

一個一個説明してくのも面倒いのでダイジェストで行ってみよう

（歩行の場合）

「はい、歩いてみましょう」

「えっと、歩く、歩く・・・」

「普段はそんなことを意識して歩いてはいないでしょう？ I Sは手足の延長です。いつも通り目的地まで行くだけでいいんですよ」

「そうなんですか？ えっと・・・おおく」

「ふむふむ・・・」

く飛行の場合く

「ど、どうすれば!?」

「背中に翼があると考えましょうか。白ハ口頼めるか？」

『リョウカイ、リョウカイ!』

「あのハ口、とやらは喋ると片言なのだな」

「翼があることく♪」

「マスターすんの早くね？」

「・・・背中に翼・・・」

とまあ、めっちゃ楽しそうに空を舞っているでございませす。こんだけできれば明日には戦闘用の機動ができそうだな。

つてか、さっきまで木刀持って俺のこと睨んでた篠ノ之箒がいつの間にかメモとつて

てびつくりした。織斑一夏を守るために動いてるってかんじだからどうにか強くなるうとしてんのかねえ・・・俺の特訓方法は昭和ライダーのアレかハートマン軍曹式しか知らんからな・・・教えるのが上手そうなら山田先生の所に一回行ってみるか。

「さて、今日はこれが普通にできるようにしましょうか」

「はいー」

ん？なんかピットの方が騒がしいな・・・

「お二人とも、ちよつと用事が出来たのでケガだけないように気をつけて練習してください」

「わかりましたー！」

「・・・本当はどうなのだ？」

「・・・ピットの方が少し騒がしいのでね。わざわざ織斑一夏さんに心配をかけることを言う必要はないでしょう」

「・・・そうか」

あ、もしかしてこれも何かの策略か何かだと疑われてる？まあいつか。

「俺は織斑千冬の弟で織斑秋斗だぞ!?？なんでお前がああな愚妹を庇って主人公の俺の邪魔をしてんだよ!?？」

「はあ？ 貴方が何者であろうが、人が努力をしているのを邪魔しようとする人間はこのセシリア・オルコットが許しませんわ！」

「……えつと、俺の想像してた状況と違う……弟くんがISの自慢のためにそろそろ来るかなあ、とは思ってたけど。ついでに織斑一夏の批判を緩和する踏み台にしようかとは思ってたけど！ 根っからのIS至上主義&織斑先生の妄信者だと思ってたセシリア・オルコットが織斑一夏を庇ってるのは想定外ですわ……」

「はあ、面倒くせえ。」

「チツ、今日は帰ってやるよー」

「二度と来なくていいですわ」

「うわあ、テンプレみたいなセリフまわしだな。織斑一夏には頑張ってもらって弟くんをしばき回していただくでしょう。」

「セシリア・オルコット」

「ピツ!?? ななななな、なんですの!??」

「可愛い悲鳴だな、おい。良いのか？ 天下の弟くんに逆らうとロクなことがなさそうだが」

「か、かわつ!?? ……コホン、別に孤立しようとは私がかまいませんわ。ですが、織斑一夏さんには失礼なことを言ってしまうましたわ……」

「まあ、アドバイスのついでになんなりすればいいさ」

「そう、ですわね。感謝いたしますわ」

「なんのことだか」

うし、お節介終わり！戻るとしましよかな。．．．はやとちりでやらかしてもうてるからなんかお詫び考えとかないとな。

「おう、いっちーが飛んでる」

「だ、大丈夫なのか？神崎さんはいないみたいだけど．．．」

「わ、私達襲われたりしないかな？」

「大丈夫だろう、多分、きつと．．．おそろく」

うーん、そこははっきり否定して欲しかったよ篠ノ之箒!!? つか、なんか増えてる!!? あー、聞いてなかったことにしよう。タブレットを出してつと。

「なにか希望などはありますか？専用機に採用するようにしますが．．．おや、皆さんどうされました？」

「あ、そーそー！」

「か、か、か、神崎くん??」

「ひいつ!!? ごめんなさい、貧相な私なんて美味しくないから食べないで!!?」

「む、遅かったな」

「・・・何故私に聞く・・・あまり知らないが、最適化（フッティング）は一時間は最短でもかかる、ときいたことがあるな」

「なるへそ」

束もできるし、普通のことだと思つてたわくはあ、色々と気にした方が良さげなことが多いな。面倒くさいことこの上ねえなこれ。

『あ、神崎さん』

「なにか？」

『その、戦闘訓練つてもうやるんですか？』

「明日から開始します。まあ、篠ノ之さんには打鉄を纏つていただくので2人だけになるということはないので安心して下さい」

「そ、そうですか・・・』

あと1時間つてところか。動作例的なものでも披露するのでしょうかね。

「ハロ、マーズ持ってきてくれ。織斑さん、一度降りてきてください。取り敢えず最終目標を見せようと思うので」

『わかりました！』

ハンガーユニットを引き連れてきたハロに群がる女子を尻目にハンガーユニットの中へとはいる。

「装着開始」

ハンガー内の壁が割れてフレームやら装甲やらを持ったアームが伸びてくる。まあ、本来なら中に入って装着とかまわりくどいことをせずにアイアンで戦う実業家みたいな装着シークエンスができたんだけど、アストレイを一度纏ってからその上にマーズユニットを被せるからどう頑張ってもバレるんだよなあ……はあ、システムチェック開始。

――主ジェネレーター・サブジェネレーター起動

……正常に作動、待機出力で安定

――各部センサー起動

……異常無し

――各部パワーアシスト起動

……エネルギー供給正常、出力正常

――FFCS（射撃統制システム）起動

……異常無し。

頭部イーゲルシュテルン×2

アサルトライフル×1

ハンドガン×1

リボルランチャー×2

膝部グレネードランチャー×2

接続完了、電子ロック及び物理ロック正常に作動。

ー各部分ラスターユニット、PIC起動

・圧力異常無し。可動の問題無し。正常に作動中。

ーエネルギーシールド起動

・発生に問題無し。増加コンデンサー異常無し。

ー右腕部思考連動システムに接続

・同期完了。タイムラグ0.1秒以内で安定

ーマーズユニットとシステム同期

・完了、異常なし

・システムオールグリーン

ハンガーユニットが展開、カタパルトだのなんだのが展開して射出される寸前で動きがとまる。さて、今回は何かな？システムに設定した記憶はないんだが何故か頭が空を見上げる状態で固定されて、問いかけに対して返答しない限り絶対に動かなくなるんだよなあ。緊急の時はないんだけど、訳分からん。

『目覚めろ』

「その魂」

ふむ、今回は仮面ライダーアギトのキャッチか。色んな名言やら決め台詞やら出てくるから割と面白いから構わんがちよつと怖いんだよなあ。

「それがそーそーのISなの？」

「おう、全身装甲型第二世代機、マーズだ」

「ヒトツメ・・・ネトラレースリイ？」

「な、何を言っているのだ一夏!!？」

なんで織斑一夏がビルドダイバース リツラアイズ!!?のネタを知ってるんですか?しかもこれはモノアイであってヒトツメではないんですが?ドートレスとかデスアーミーとか、割とマイナーな気がする機体が出てきて面白かったですまる。チャンピオンが別のゲームを始めたのには引いたな〜人って極まると明後日の方向に向かって行くもんなのかな?ファイターズの3代目なメイジンもそんな感じだったし。

・・・話を戻すか。宇宙で戦っていたMSの真髄、見せてやろう!!? (そんな大層なことはできん) ロトに射撃させて、ハロには説明を兼ねて下がってもらおうようにしとくか。

ーPIC起動、スラスター圧力正常。

さあ、行くか。何回やっても怖いよな〜

—————SIDE OUT—————

「「ほえ〜」」

「ほあ〜」

開いた口が塞がらない、というのはこういうことだ！的な感じで全員が似たような顔になってる。5人のタイプが違う美少女たちが口を開けている様はアホ面を通り越して可愛いさすら感じさせる。それを成したのはマーズことアストレイを纏った神崎だった。

『ソウ！ソウ！ジツタン、ジツタン！』

「流石に流れ弾とか危ないからなしだな。つか、回避運動見せるだけだろ？」

「……これ、参考にしなきゃいけないのかな？」

「……明らかに人がしてはいけない動きをしてる気がするのだが」

「……そーそー、すごいね！」

「本音、すごいで済ませられる次元じゃないでしょ……」

「うんうん」

余裕そのもの、といった口振りでもハ口と雑談をしながら宙を舞う神崎目掛けてロトから発射されるのは無数のミサイルとマシンキャノンからの模擬弾。その噴煙が視界のほぼ全てを占める中、その全てを舞うように避けていつている。

スラスタ―による回避、足を振り上げて上下反転、逆さまの状態のままスラスタ―による機動、ISの世界大会であるモンド・クロツゾですら見られないような特殊なものがこれこれ30分ほど続いている。

「とまあ、織斑さん、これを見てどう思いました？」

「えつと・・・なんていうか、変、でした」

「それはよかった」

「む・・・一夏から離れてもらおうか」

すらつ、とどこからともなく取り出した木刀を神崎に向ける篠ノ之箒。事情をよく分かっているなさそうな本音を除いて織斑一夏たちも一歩引いている。

「・・・言い方が悪かったですけど、その反応は傷つきます。DMじゃねーんで」

「じゃあ、どうだと言うのだ？」

「色々と公開されてる映像をみると、ISって基本的にスラスタ―で移動じゃないですか。んでもって絶対地面に足が向いてるでしょ？地に足つけてる訳じゃないから・・・っていう感じでセオリーを無視してみました」

「「「「「」」」」」」

「またもドン引きされる神崎。古今東西、培われてきたものをスルーするのは難しいというか、普通は考えつかないものである。神崎はことも無げに言っているが、トンデモ

である。

「別に難しいことでもないんで。ISに長く乗っている人よりかはやりやすいはずですよ」

「や、やってみます！あ、あと・・・」

「なんででしょう？」

「神崎さんって敬語慣れてないですよね？いつもと同じ口調で大丈夫ですよ」

「バレてーら・・・」

ガクつと肩が落ちる。モノアイでなかなかゴツイ機体が肩を落としているのはなかなかコミカルであった。

――時間後――

「そんじや、今日はこれにて終わり！ちゃんと汗流してしっかり寝ろよ」

「「「はーい」」」」

汗を拭きながら、自身の宿舎へと戻る神崎。普段は急な来客があっても大丈夫なようにプレハブのほうに寝泊まりしている。当然誰もいないはずなのだが・・・

「・・・人の気配？」

ぼそつと呟く神崎。篠ノ之東も勝手に入るぐらいはしてそうだが、彼女の場合は何かしらの痕跡がある。例えば、人参型のロケットが刺さった跡とか。

相当奇抜なもので無い限り、改造オツケーな制服の中から拳銃を取り出して左手に。強度の高い右腕を簡易的な盾とすると同時に日本のロボットアニメで初めて人が搭乗するマジンガーなZのアイアンなカッターでカウンターが出来るように構える。

「・・・はあ、いい加減にしてくれ・・・」

消え入りそうな声でぼそつと呟くと大きく深呼吸、ゆつくりとドアを開く。

「お帰りなさい！ご飯にする？お風呂に、きやつ！！？」

「動くな。何処からの回し者だ？直ぐに答えたら楽に殺してやるよ」

「あらー、直ぐに答えなかつたらどうされちゃうのかしら？」

「・・・安心しろ、エロ同人みたいなことにはならんからな。世界の拷問をフルコースで

ご馳走してやるだけだ」

「・・・」

言葉だけで見れば緊張感漂う映画のワンシーンのような状態だが、脅している神崎はともかく、相手は裸エプロン？な青髪美少女である。どっちかといえば、見せられないよ！的なビデオ状態だ。

今まで様々なラノベや二次小説を読んできた諸君ならこの後の展開など容易に想像できるであろう。

「・・・えつと、お、お邪魔しました・・・」

織斑一夏の登場である。

ちようど神崎の影になつて見えなくなつていたやうで拳銃やアイアンなカッターは見えていない様子だ。

神崎は勘違いされたままだと何かと面倒臭いと考えたのか、馬鹿でかいたため息を吐いて拳銃とカッターを収納してドアを閉めようとする織斑一夏に声をかけた。

「あー、織斑。ちよつと戻つてきてくれ。この女に見覚えあるか？」

「え？えつと、生徒会長さんだつたと思うんですけど・・・」

「・・・ああ」

考えること5秒程。そういや入学式でめつちや睨んできたなコイツ・・・と虚空を見る神崎。取り敢えず生徒会長を解放した。

「生徒会長さんについては後で。織斑さんはどう言つたご用件で？」

「あ、はい。山田先生が話があるつて探してましたよ？」

「そうか・・・何がしたいのか興味はないが、俺がここに戻るまでに消えとけ痴女が」

「っ！そんなこと！」

「あ？じゃあ美人局かなんかか？ま、どーでもいいわ。役割がなけりやこんな所にいる必要はないしな」

学校や訓練中には見せなかつた冷たい雰囲気を纏う神崎。少なからず交流のあつた

織斑一夏は戸惑いを隠せず、何処か食えない笑みを浮かべていた生徒会長をいつの間にか真剣な表情になっていた。普通に生活していれば感じることもない圧力、言葉にできない恐怖を感じて怯える表情になった織斑一夏を見て神崎の表情も変わった。首を捻ってエゲツない音をさせると雰囲気霧散した。

「・・・はあ、申し訳ない。個人的なことでイライラしてた。生徒会長、アンタの要件は大体わかるが必要ない。が、敵対するつもりはないから安心しろ。織斑さんも悪かったな、八つ当たりして。なんのかんの言われる前に部屋に戻りな」

それだけ言うとうと神崎は部屋を出て行った。

ぼっん、と放置された2人は顔を見合わせると同時に頭を下げた。

「はじめまして、織斑一夏です」

「はじめまして、IS学園の生徒会長で更識楯無よ。よろしくね織斑さん」

「はい！あの・・・」

「わかってるわ、彼の最後の言葉よね？」

こくん、と頷いた織斑一夏に生徒会長は話し出した。

長くなるので要約しよう。

色々な研究機関が・・・

ISに乗れる男が2人も現れたぞ！

← 1人は織斑千冬の弟？なら手は出せんな・・・

← もう1人は国籍なし、親なしのないない尽くらしいぞ！

← なら誘拐して研究材料にしても構わんのだろう？

といった状態らしい。そして似たような思考回路で世界各国も狙っており、色仕掛けやらなんやらの日々。おまけに女尊男卑な生徒達から毎日のように嫌がらせをされているらしい。

「そんな！でも、よく一緒にいる私達は？」

「自分にだけヘイトが向くように動いてるみたいよ。おそらくその役割っていうのが関係してるんだと思うけど、何か聞いてないかしら？」

「いえ、何も・・・」

「そう・・・」

取り敢えず用が無くなった2人はプレハブを出て行った。

「チツ、もう刀奈にアイツが接触してんのか・・・簪も本音もアイツよりってことか。なら一夏と一緒に殺すか？そこを俺が慰めれば堕ちるよな！」

出て行った2人を見送りつつゴミみたいなことを言っているゴミ。なんやかんや自分に擦り寄ってきた女子生徒たちを使って神崎に嫌がらせをしていたが、目に見えた効果が無く何かしらの弱点を探しにきたようだ。自分と違い、プレハブに住んでいることに優越感を感じていたようだが2人を見て無駄にイケメンな顔を歪めた。

「前にイージスとかが落とされてから改良したコイツらなら楽に殺せるだろうしな」
ゴミはデイスプレイに映った3機を見て笑う。

・・・気色悪いのでワードレッドの拳を叩き込んで駄目だろうか？

六話

「・・・またか。暇なのか？わざわざ朝早くに来てるのより早く下駄箱に剃刀って、何がしたいの？毎回毎回毎回回置いてあるけどタダじゃないよな？休み時間もわざわざ教室にきてピーチクパーチクと・・・あの無駄にイケメンな顔面にオオトリ版のフルバースト叩き込んでやろうか？3年もたまにいるしハーレムってか？羨ましいとか微塵も思わんが気色悪いわー。俺が織斑一夏達に手エ出したってマジで言ってるのか？んなことしたら世界最強と最狂にぶっ殺されてるわ！・・・あゝイライラするわー」

本格的に暗殺を・・・おっと、闇が全開になってた。

どーもー、教室に忘れもんして早めに来たらいつも通り剃刀が入っててなんか色々な感情を超越しそうな神崎蒼です。取り敢えず首を鳴らしてリセットオ・・・うし、剃刀はバラして刃の部分だけ左腕の中に装填つと。なんやかんやで甘いもん食べれてねえし、作るかく確かストックは・・・

「あ、そーそー！」

「ん、のほほんさんか。珍しく朝早いな？」

「うん！かんちゃんかねー夜更かしするとそーそーに怒られるから朝早起きしてISを

作るんだ！だつて〜」

「そうなのか」

ふむ、姉に劣等感を感じて無茶しまくつてた頃に比べたら変わったな。酷い時には三徹とかやって俺とおやつさんsで全力説教したしな。そういや姉つて確か生徒会長だっけ？まあ、あの子はあの子だし気にする必要は無いかな。

「まあ、無理はすんなよ。俺は織斑さんのISをとつとと完成させるよ」

「うん、頑張つてねそーそー！」

「おう」

はあ・・・束から織斑一夏、篠ノ之箒、織斑千冬の事を頼まれてなかったら織斑秋斗を暗殺して雲隠れしてたぞ。想定はしてたけど延々と集中砲火を喰らわされ続けんのはやっぱメンタルに来るわなあ・・・

諦めよう。

ノアに戻りまして・・・ビルダーからパーツの完成報告があつたから組み立てに入るか。

スピードよりは小回りを意識してアポジモーターを増設、ISは兵装以外は全部同じエネルギーに依存してるからなく小型のプロペラントタンク増設しとこ。確か、白と赤がいいんだっけか？・・・絶対アストレイ意識してんだろ・・・まあバレなきやいと

しますか。

武装は、背中にアーム展開式のキャノン2門とアサルトライフル2丁と近接用ブレードの基本的なもんだな。素人がマガジン交換が出来るとは思えんしOSの方に組み込んでガイドを出すようにするか。こういうのはF91から学んだりしたけど、コンピュータの補助ってマジでありがたいわー相手の行動とかをインプットしとけばシュミレーションとかで練習しまくれるし本当にお世話になつてますわ。

あ、ちなみに背中のキャノンはウインダムのマルチランチャーパックの核撃でないv erを参考にしてる。いやー高速戦闘とかを考えなくていいお陰で空気抵抗とかガン無視した装備が可能だからいいよな〜ちなみに換装可能だったり。ストライクのも作ってあったりするけど、前にGAT-Xシリーズ出てきてるからストライクがない確証なんてないから俺が黒幕とか疑われないようにしないといけないからお蔵入りの可能性が高いんだなこれが。

・・・話を戻そう。シールドビットを装備するか考えてたけど、普及してないのがあるのはまずいから却下で、サブアームを両肩に接続してその先にシールド装備で完了ですな。どーでもいいけど、なんでISって内蔵武装ないんかねえ。

うし、終わり、完成!!? 朝ごはん食べ行きますかな。

「あ、おはようございます」

「か、神崎か……」

わー、なんか気不味っ!!? 取り敢えずやらかしたのは分かるから謝って気にするなどは言われたけどな……

「そ、そうだ、一夏のISはどうなっている?」

「完成はしました。今日の放課後に乗って貰って調整して終わりですかね」

「……本当か?」

「そうですか?」

なんかぶつぶつ言ってるけど、普通じゃね? おやつさん達だったら二機分くらいなら気づいたら終わってるしなあ、遅い方だと思うが。

「そう言えば、束と連絡をとってあげて下さい。ちーちゃんが返信してくれないーって騒いでるんで」

「む、束が?」

驚くことか? 顔合わせに来た時も大分ベタベタしてた(一方的に)から特になんも無いと思うけどな

「おばちゃん! 日替わり定食大盛りで!!?」

「はいよ! 今日は焼き鯖だよ!」

「よっしや」

「アンタ、大丈夫か。いつも以上に顔が死んでるよ?」

「・・・コイツの表情が分かるんですか?」

「うん? コイツは表情筋が死んでるけど、感情は多分人一倍豊かだからねえ。コイツ以上にわかりやすいヤツは今のところ見てないね」

「そう、ですか」

「・・・わかりやすいつて、褒められてんのかこれ? 違うか。」

「気づいたら織斑先生が正面に座ってた件について・・・そろそろ盲信者に刺されそうな気がするんだが。」

「そのISやマーズについての知識と技術はどうしたんだ?」

「ああ、それに関しては実験の日々のなかで頑張つて(自力で)勉強したからです。記憶がなくても、当時の状況が明らかにおかしいのは分かってたんで、逃げ出した時に困らないように、ですね」

「超、頑張つたでござるよ。アストレイを望んだけど、整備の知識とかなかったからISの取説見つけてそれを参考にして実地で練習しまくつてようやく今の状態に持つてこれたわけです。おやっさん達の所で技術を磨いて・・・死にたくないから現在進化する形で必死ですわ。意外とスパロボを敵としてシミュレーションとかやるとめっちゃくちゃ糧になるぜ。」

・・・一撃必殺の拳が、無限に追いかけてくる拳が飛んでくる・・・鬼早くて全然追いつけなくて一方的に可変戦闘機にボコられ続ける・・・こっちの攻撃が当たってるはずなのに全然効いてない・・・やめて！惑星レベルのハンマーは死ぬ!!？俺達が地獄？因果律を弄る？チートじゃん!!？カエレ!!？・・・あ”あ”最弱の攻撃のハズなのに地形が変わっていく

「おい、神崎!!？」

「・・・はい？」

「大丈夫か？どんどん目から光が消えていったが・・・」

「ああ、大丈夫です。ちよつとしたトラウマを思い出しただけなんで」

「と、トラウマ・・・」

ん？なんかまずい事聞いたって顔してるけど、またなんかやった？まあいつか。

勇者とかには辛勝できるようになっただけど、勇者王とかバルキリーヤとか、カイザーシリーズには全然勝てないでござる。ハエーイ ツエーイだからなー。ローエン グリンランチャーとかなら割とダメージ与えられるけど、取り回しとかチャージとかでそもそも当たらないっていう・・・よくあのあしゆらな男爵とか筆頭にあの人達を追い詰めるとかできたよな。

「では、色々頼んで悪いが、頑張ってくれ」

「ありがとうございます。あ、今日は第三アリーナでやってるんで見に来てあげて下さい」

「ああ」

さて、とつとと飯食って逃げるとしますかな。視線でメンタル的なHPがゼロになりそう。

?ドカン／・・・コンテニュー、ヴェハハハッ！ワタシハツフメツダアツ！

ーーーーなんやかんやで時を飛ばそうー

「あつたか、ねむ・・・」

周りからの視線は変わらず、居心地悪くて休み時間の度にあちこち歩き回った結果誰にも見られず日向ぼっこできるベストプレイスを見つけたのである！ちようどお昼時だけ日光が当たる場所で、日差しとまだ暖まりきってないコンクリとの温度差が気持ちええんじやく

さてと、

「なぜいる？」

「そーそーの後を追いかけて来たの〜」

「顔色が悪かった気がしたから・・・」

「そっか」

ハ口の口の中からマットを引きずり出して二人にシュー！ふう、そろそろ眠気が限界だわ。

「んじや、時間になったら勝手に起きるからどうとでもしてくれ・・・」

「うん、おやすみそーそー」

「おやすみなさい」

—————

「・・・ねえ、本音」

「・・・なに？かんちゃん」

「なんかさ、蒼さんって不思議な人だよね」

「そうだね、私がマイペースでも全然怒らないし」

そうじゃないんだけど・・・と苦笑する簪。2人は寝ている神崎を間に挟んでそんなことを話していた。二人にとって神崎は不思議、としか言いようのない人物である。

簪にとっては、恩人であり同士であり、今までに関わったことのないタイプの人間であつた。姉との確執で自分でも嫌な子になつていると自覚はあつたが変えられなかつた。今は親戚のおじさんのように接してくれている倉持技研のおじさん達にも嫌な態度をとつてしまつていた中、その間に入つてくれたのが神崎だつた。卑屈になつて

いた自分に根気よく話をしてくれて、今のようになんか頼ることができるようになれた。・・・原因となった姉とは話をできていないが。とにかく、彼は簪にとって、特別な人である。

本音にとつて神崎は優しい人、である。いたずらには怒るが、たまたま失敗してしまつたことなどは絶対に怒る事をしなかつた。周りと比べて自分が鈍臭いことに自覚があり、色んな人に怒られてきたが怒らないのは簪と神崎だけだつた。常に周りを見ていて誰かのために行動できる優しい人だ。

「そーそーつて、寝てる時はちよつと可愛いよね〜」
「うん、わかる」

さらつさらな白髪を撫でながらいつもの無表情がほんの少しだけ崩れた寝顔を見て微笑む2人。無表情がデフォルトで顔には大きな傷、なのに口調は割と明るいついという違和感以外何も感じられないような男だが、とにかく自分の為と言いながら困っているのを見るとどうにかしようとしてくれる優しきを持っている。だからこそ・・・

「かんちゃん、そーそーのことどう思う?」
「どうつて?」

「私はね〜そーそーの事好きだよ。」

「・・・えつ?」

突然放り込まれた爆弾に動揺が隠せない簪。神崎のことはなんとなくお兄ちゃんのような感覚でいたが、本音の言葉を聞いて何故か動揺してしまった。

「かんちゃん?」

「そ、そっか。でも、どうして?」

「えっとねー、そーそーはねすつごく優しいの。私達に迷惑がかからないようにって色んなことをしてくれてたんだよ?」

「え?」

ちなみに、神崎は自身に関わる織斑弟以外に嫌がらせのターゲットが向かないように誰にも気づかれないように動いていたのである。・・・何故か本音にはバレていたようだが。神崎達一年生が入学したのは5日前なのにこの状態なのは、割と世間の歪みがここに現れているのだろう。

「かんちゃんは?」

「私は・・・わかんない。なんか、お兄ちゃんみたいだなって思うけど・・・」

「そっか」

ほけくと呟く本音。ちなみに髪を撫でていた2人の手は止まっていない。

「・・・何をしているのだお前らは」

「お、織斑先生!?!?」

「ほええ〜っ!?」

そこに現れたのはピンクハ口を連れたちよつと不機嫌そうな織斑千冬である。一夏のI Sについて話を聞こうとしたのだが、いかなかったためにあちこちを探していたのが三人の状態を見て何故か不機嫌になっていた。

「・・・授業には遅れるなよ」

「はい!」

敬礼しそうな勢いで立ち上がる2人を見て、ちよつと罪悪感を感じたのかバツが悪そうにする織斑千冬はピンクハ口に足を小突かれながらもどこかへと去っていった。

・・・一方その頃・・・

『ほう、簪、本音、千冬はあの男に傾いていると?』

「ああ、そうだよ。刀奈も接触しに行つてたし、暗殺は難しいんじゃないか?」

『ふむ、ガンダム4機を相手にして損傷はバックバックと右腕だけか・・・三機に追加してストライクダガーも何機か追加しておこう』

「は?・なんでだよ」

『はあく自分で考えろ』

その後、何やら話をしたあと電話を終えたようだ。織斑秋斗は何やら呟きながら校舎へと向かっていった。

「大丈夫だ、俺はオリ主なんだ、何があっても最終的には全員俺の所へ来るんだ、取り敢えずコーディネーターの能力でセシリアとの戦闘は余裕だから、落としたモブ女共で遊ぶかな」

ちなみに、ストライクダガーとはGAT-X105ストライクを一般ピーポーが乗れるように色々とスペックダウンした量産機の名称である。

ついでに豆知識を一つ、SEEDシリーズにおいてガンダムという名前はOS（制御コンピュータ）のことであり、これらの機動兵器のことを「ガンダム」と呼称されたのは本編では一度もなかったりする。

「どうしたというのだ、私は……！」

またまた場所が変わって電子タブレットを女性というか、人が出しちゃいけない握力で握る美人教師が1人……ちっふーこと（今の所誰も呼んでない）織斑千冬である。その姿はどんなアホでも不機嫌であるのが分かる程のオーラらしき何かが出ている。普段は体育座りで体を限界まで丸め、近づいただけで即座に反応し身構える蒼が簪と本音に寝顔を見せるまでに心を開いていると分かります、がつつり嫉妬しているのである。

「あれ、お姉ちゃんどうしたの？」

「む、一夏と簪か……」

「どうしたんですか、千冬さん。行く先々で生徒が今日は千冬さんがえつと、なんていうか、女の子の日だってウワサになってたんですが・・・」

「なんの話だ？」

パタパタと織斑千冬を見つけて駆けてくる2人を見て少しだけ余裕を取り戻したようだ。が、本人にその自覚はなかったようだ。以前にも言った気がするが、織斑千冬は肩書きやらなんやらのせいでまともな恋愛をしてきてないのである。

「うーん、まあいつか。布仏さんと更識さん？を見てないかな、神崎さんと一緒にいるって聞いたんだけど・・・」

「・・・ああ、その3人なら中央の広場の奥にいたぞ。・・・用事を思い出した。でわな。」
3人の名前が出た途端に機嫌が急降下、またまた不貞腐れた様子で歩いて行つた。・・・たまたま進行方向にいた生徒たちをビビらせながら。

そして、言われた場所にたどり着いた2人が見たのは・・・

「「え？」」

「やめろ・・・こつちに、来るな・・・!!？」

「蒼さん!!？」

「そーそー!!？」

2人に挟まれ、
魔されている神崎だった。

七話

どーもー、織斑千冬と話してて、シュミレーションで難易度設定ミスってトラウマ作ったことを思い出したせいかわらツシユバックして跳ね起きたら簪と本音に泣きそうな顔で抱きつかれて、織斑と篠ノ之さんからなんとも言えない視線をいただきました。神崎蒼です。

一つだけ・・・どうしてあんなった？しかも織斑千冬もなんか不機嫌だし・・・
・・・なんか勘違いが加速してる気がするけど頑張つてスルーしよう、うん。

さて、今日はクラスの代表を決める日でございます！頑張りましたわ！結果が出ないとなんとも言えないけど、射撃技術と射撃、ビットに対する回避術は伝授したから、織斑弟には勝てるかなー？まあ、セシリア・オルコットには流石に勝てないだろうけどなー。ちよくちよくアリーナ使つて色々やつてみたいだし、こうなつてくるとますます初日の態度が良くわかんねえよなく練習してる時に織斑弟を邪魔してたのもそうだし・・・やっぱわからんな。

初戦は織斑一夏vsセシリア・オルコットだし、データ収集ついでに調べてみるかな

く背景とかなんか色々あったりして・・・

「神崎さん」

「ん、どうした？」

「一週間ありがとうございました！頑張ってきました！」

「おう、まあ勝とうとしなくていい。そもそも国の代表候補生と戦わせるっていう前提条件からして間違ってたんだ、自分の満足できる戦いをして来い」

「はいっ！」

うーん、輝く笑顔ってああいうのを言うんだろな。ちなみに絶対にここに居そうで何故かいない織斑千冬は公平さを保つために他の生徒達と一緒に観客席に座ってたりする。俺？機体の最終調整でここに居る。機体トラブルで負けましたとか自分に黄金の惑星クラツシヤーぶち込まなきゃならなくなるわ。

「一夏・・・」

「箒、頑張るね！」

「ああ、勝て！と言いたいところだが、神崎が言っていたことが的を射ている。だから、頑張つて来い！」

「うん！神崎さんが作ってくれた〈桜花〉・・・織斑一夏、行きます!!？」

さて、こつちもこつちで準備しますかな。

111 Side out111

カタパルトによつて打ち出された織斑一夏は足のスラスターを使つてその場に静止した。

それを見ていたセシリア・オルコツトは何処か満足そうに頷いている。

「まずは、この一週間お疲れ様と言つておきましようか」

「え？あ、はい、ありがとうございます！」

どうも素直に返されるとは思つていなかったのか、ほんの数秒間だけ固まるセシリア・オルコツト。だが、直ぐに立て直すと通信を切り替えた。

『・・・先日は申し訳ありませんでした！』

『うえっ!??ど、どうしたんですか、急に!??』

『・・・なんというか・・・物凄く緊張しております、どうしていいのかわからず、止まらなくなつてしまい・・・』

『そつか、だから最初だけいっぱい言つてきてから来なくなつたんだね』

『そういうことですわ・・・』

『・・・私は正直、秋斗に言われたから言いに来たんだと思つてた。今回は、許すよ。けど、もうちよつと言動は考えた方がいいと思うな』

『！ありがとうございます。ご忠告痛み入りますわ・・・では』

『そうだね、始めよっか』

「さあ、踊りなさい！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!!？」

「織斑一夏、日本舞踊で行きます！」

いや、そうじゃないだろう・・・という誰かの呟きを置き去りに2人は動きだす。

初っ端から蒼直伝の作戦に従って織斑一夏は手にしたアサルトライフルをぶっ放しながら、下へと落ちた。

「なっ!!？」

驚きの声を上げながらも、手にした長大なレーザーライフルを構えて射撃を行うが、サブアームに接続されたシールドがレーザーを阻む。それに対して織斑一夏のライフル射撃は面白いように当たっていく。

「努力していたのは知っていましたが、成長しすぎでは!!？」

「鍛えてますから!!？」

ちなみに織斑一夏に銃口補正や自動防御についてはまだ話していない。蒼がストレスかかりまくってイライラして忘れていたとかそんなことはないハズなのである。

彼女の性格と話を聞いて考えたサポートシステムなのだが、基本的にISは既存の戦闘機のロックオンシステム同様相手から照射されるレーダーを探知することが出来、銃

口などから攻撃などを予測してディスプレイに投影できるヤベーなシステムである。射撃なら弾の飛んでくる方向が線となって見えるが、近接戦闘の場合であればシャイニンメガインパクト!!?的な状態になったりする。戦闘データが溜まっていないのでもう少し時間がかかるが。

「うりやあー!!?」

「きやあつ!!?」

アサルトライフルと同時に背中の中のマルチランチャーをぶっ放していく織斑一夏。に對してまくだ油断していたのかガンガン喰らっていくセシリア・オルコット。ようやく本気を出したのか、プラットホームから四機の大形ビット〈ブルー・ティアーズ〉を展開、攻撃を開始する。

「はえ〜、一夏さん本当に頑張ったみたいですね〜」

「まあ、乗り始めて一週間でこれは相当なものだろうな」

場所は変わって観客席。織斑千冬と山田麻耶が感嘆の声をあげていた。

「放課後に私の所に質問をしに来たり、アリーナでISの練習をしつかりしていたみたいですから、その賜物って言うんですかね〜」

「・・・私には全然来てくれなかったがな」

「ま、まあ、お姉ちゃんにカッコいい所を見せるんだ！ って張り切ってたみたいですからね」

「そうか・・・ふん♪」

山田麻耶に嫉妬からの上機嫌、機嫌がジェットコースターばりに上下していたようだが、取り敢えず上機嫌に留まったようである。

2人がそんな話をしている間に状況は進んでいく。神崎お手製の銃口補正プログラムと防衛システム、そして織斑一夏自身の姿勢制御能力の高さもあってセシリア・オルコットに対して優勢を保っていたのだがよく考えると、セシリア・オルコットはまだ手にしたレーザーライフルしか使っていなかったのである。そこから代名詞である四機のレーザービットで攻撃を開始されれば、状況はまた変わっていく。

「これは、ちょっと、きつくないか」

「いやいや！ 仮にも私は代表候補生なのですわよ！！？ その私とほぼ互角ってなんなんですかの！！？ 本当にISに乗って一週間なんですの！！？」

おくい、お嬢様キャラどっか行つてんぞ？ 的なツツコミを入れたくなるレベルで動揺しているセシリア・オルコット。ちなみにこの試合の事を聞きつけて観客席で見ている他の組やら先輩方も概ねオルコットと同じ感想を持ってたりする。

「エネルギー残量200か・・・これで最後かな」

「私もこれで決めて差し上げます！」

織斑一夏はシールドを全面に掲げて突撃する体勢へ、セシリア・オルコットはその場に留まりビットを展開して待ち構える体勢に移行した。

果たして、結果は、

『——！シールドエネルギー残量0！勝者、セシリア・オルコット!!？』

.....

「まあ、その、なんだ。が、頑張ったな、一夏」

「ほうぎい〜〜わだし、できれば勝ちたかったよ〜」

「ん、あつ、ちよつ、どこを触つて、あんつ」

ビットにて、号泣する織斑一夏が篠ノ之箒の割とデカめなメロンに顔を埋めているという状況。

織斑一夏、泣く。篠ノ之箒、喘ぐ。クラスメイト、鼻血を流しながら拝む。教師の2人戸惑う。カオス極まれり！である。

「ほうぎ〜！」

「わ、わかったから一回、離して！あんっ！」

『ライフフル初弾装填よし、安全装置よし、リボルランチャーよし、ブレード2本よし、戦闘準備完了っ』

「蒼さん、あの男に負けないで下さいね？」

『俺の事が世間に報道された時、経歴とかも大々的にやってたから知ってるでしょ？』
「でもね〜？あの人すごい自信満々だったんだよ〜？」

『ふむ・・・まあ、織斑一夏と違ってこの一週間何もしてなかった奴がなんでそんな自信があるのか興味すらないが、警戒はしときますかな。ありがとうな』

礼を言われて嬉しかったのか2人ともすっ、と頭を差し出すがアストレイはISのよう
うに自由に脱着できる訳ではないので不満そうな彼女らの前でヒラヒラと手を振った。

『このことは分かかってんだろ？試合パパッと終わらせて戻ってくるから待ってる』
「うん、いつてらっしやい」

「頑張ってるね、そーそー」

『はいよ』

リニアアカタパルトに脚部を固定、アストレイ（マーズジャケット）の各部スラスタ

に火が灯る。

《リニアボルテージ規定値まで上昇、射出タイミングを神崎 蒼に譲渡します》

『りょーかい！マーズは神崎 蒼で行きます！』

声と共に発進、ある程度進んでから指定された位置に足を後方に振り上げて一回転、綺麗に静止した。観客席の一部から何やらざわめきが聞こえるが、それも蒼への罵詈雑言に掻き消された。

『何あれ？今時全身装甲型なんて使ってるのアイツ？』『てゆうか、なんで二番目如きが I S を持つてるの？』『どうせ、余ったパーツの寄せ集めじゃない？』『あはは！うけるー』

なんとというか、悪意そのものである。そりやどこぞのアルティメット改めデビルな細胞やらアークな人工知能が人類滅亡を選択してもしようがない気がするものである。そして、彼女らの考えも完全に間違いはないのであろう。人間とは、他人を見下すのが得意であるから仕方がないのかもしれない。

・・・かと言って、その悪意に晒されている本人がそんな事を悟れるなど、よつぽど
のことがない限りあり得ないが。

『・・・・・・・・ちなみに、指定した人物以外を皆殺しにするのつてどれぐらいかかり

そう?』

「約2時間程度。アプルホール、ロト、ヒルドルブを使用した場合は1時間以内。・・・そつかあ・・・まあ、約束あるし、関わっちまったからしやーないと思いますかな。にしても遅いなあ』

恐ろしい事を言っているが、今のところそのつもりはない。

『まだかなあ、』

右手がえぐい音を立てながら握って開いてを繰り返しているがそんなつもりはないはず、である。・・・多分、きつと。

「待たせたなあ!!?」

無駄にカツコつけて反対側のピットから飛び出してきた自称主人公。待たせていた事について特に申し訳ないとかいう感情はないらしい。そして、彼の纏うISどこからどう見てもディアクティブ状態のエルストライクなのである。というか、MS男子? 化したらこんな感じになるかな?といった風情である。ちなみに私はバンシイのが好きだ。

『双方揃いましたので、戦闘を開始します。・・・3、2、1! 開始!!?』

「行くぞえ!!?」

と、勢いよく飛び出してくるストライク(笑)手にはマシンガンとナイフを装備して

いるが、マシンガンではなくナイフを振り翳して突進してくる。

『……俺は、馬鹿にされているのか？』

ぼそつと一言、持ち上げようとしていた右手のライフルを下げてストライク（仮）に正対する。すると、何を勘違いしたのか織斑弟はドヤ顔になる。

「はっ！反応できてねえみたいだなあ！そのまんまやられるおっ!!？」

何をどう勘違いしたのかそんなことを宣いつつ、突撃してくる。先程の2人の機体よりもスピードはあるが、技術も何も無い真っ直ぐ一直線である。それでなんとかなるのはアホみたいな装甲を持つスーパーロボットぐらいである。

つまり、大きくなる的ということだ。

『リボルランチャー、初弾装填、安全装置解除、右の後五秒後に左を手動照準で射撃、開始！』

背中のレッドフレームのHユニットを改造したバックパックの上部が迫り出して両肩に接続、射撃準備を完了する。次の瞬間、

轟音。

発射された直径81ミリの特殊な徹甲榴弾がその顔面に直撃した。

……本来、徹甲榴弾というものは装甲などに突き刺さってから爆発する対戦車兵器として使用されているのだが流石にパワードスーツに対してそんな物を使ってしまう

ば汚ねえ花火が大量生産される事になるので、爆発した際の衝撃波のみを伝えて操縦者にダメージを与える、しかも装甲がなくてもISに使われているエネルギーシールドにも貼り付く織斑秋斗に使用するためだけに作り、今のところ今後使う予定のないものだ。

「てめえ、やりやがつ!!?」

砲弾内にある時限信管が発動、計算された炸薬が余す事なく全ての衝撃波をその身体に叩き込む。悲鳴すら上げられずにアリーナの壁に叩き付けられる織斑秋斗。すぐさま左の砲門を照準、射撃してちょうど鳩尾の辺りに直撃する。

「かはつ!!?」

ちなみに同時にリボルランチャーのシリンダー部分が回転して次弾の装填が完了、すぐさま射撃が可能な状態になっている。

「てめえ、男の癖に銃なんか使ってんじゃねえぞ!こんの、卑怯者があつ!!?」

「そうよ!この卑怯者!」「とつとと研究所でモルモットにでもされてなさいよ!」「早く死んじやえばいいのに!!?」

織斑秋斗の叫びに呼応するように飛んでくる罵詈雑言の数々。

ー

「なんで、みんな神崎さんにこんな・・・」

「・・・蒼さんは、後ろ盾がなくて2人目だから」

「楯無の言う通りだな。あの馬鹿者にはブリュンヒルデの弟という肩書きがあるから、ちやほやされて調子に乗ってるんだろう」

「わかってるけど、なんでっ!」

場所は変わって織斑一夏のピットにて。

簪、本音、篠ノ之、織斑は設置されているモニターで神崎の戦闘を見ていたのだが、当然音声も入ってくる。それを聞いて動揺を隠せない織斑一夏に対して3人は余り表情を変えていなかった。

薄々ながらも、蒼を取り巻く状況を理解できる3人だが織斑一夏は理解できないようだ。

「箒は分かんないけど、2人は神崎さんと仲良かったよね? 2人共お、怒らないの?」

「私たちが怒っても意味がない。それに、今の蒼さんはめちやくちや怒ってる」

「え・・・?」

「そーそーはねー、ものすつごい怒るとねー首がずつと右に傾くんだよ」

「む?言われてみれば・・・」

マーズジャケットの構造上、頭部の可動範囲はほぼ死んでしまっていると言えるが明らかに頭が傾いているのが見える。

そして、滞空しているだけだった神崎が右手のアサルトライフルを向ける。

そこからは、圧倒的、としか言いようのない状況だった。

2門のリボルランチャーからの時間差射撃によって絶え間なく衝撃を叩きこまれ、声を上げようとすれば喉元にアサルトライフルの弾が直撃する。途中でPS装甲が起動したのか色が変わったりしたが、特に何かを出来る訳でもなくシールドエネルギーがゼロになった。

「クソ、なんなんだよお前は！原作に出てこないモブキャラの癖に！踏み台なら踏み台らしく無様に負けてろよ！ストライカーで勝てねえってどういう事だよ・・・」

織斑弟が何やら叫んでいたりと観客席もブーブーうるさかったりするが、取り敢えず全部スルーしてピットへと戻る。

「蒼さん・・・」「そーそー?」

「ん、大丈夫。ちよつとやりたいことが有るから30分ぐらい外にいてもらつていいか?」

「・・・わかりました」

心配そうな二人を外に出し、アストレイを分離してハンガーへと戻していく。

「にしても、目立った実力がないものにも関わらず突撃してくる、自分を主人公と呼ぶ、織斑一夏をやたらと目の敵にする、そして、ストライクを知っている・・・もしや、他に

転生者がいて洗脳でもしているのか？であれば行動に説明がつかない」

微妙に合っているようで全然違うことに至った蒼。言葉と共に複数のディスプレイがポップアップし、高速で映像が流れていく。右の幾つかは監視カメラの映像、中央は織斑弟個人の銀行のカネの流れ、左の幾つかは織斑弟の持つネットに繋ぐことの出来る電子機器一切切の通信履歴が流れていく。

少し時間がかかるようなので敢えて言っておくが、これらは全て犯罪です。別の世界線ではミサイルの発射システムをハッキングして日本に飛ばした理性がアンコントロールスイッチが常時押しっぱなしな兎さんが居たりするが、良い子も悪い子も真似しないように！

「ううむ、これといって怪しい物はなし、か。強いて言うなら年の離れた打田圭介つてのが気になるが、普通にゲーセンに行ってるぐらいだから悪友つてところか」

ふむ、と納得したタイミングで外から来客を知らせるチャイムが鳴った。先程の二人かと扉を開けた瞬間にその胸に飛び込んできたのは織斑一夏だった。

「ぞてうざ〜ん!!?」

「グフっ!!?・・・何事?」

クリティカルヒットを喰らいつつもしっかりと受け止めた蒼はその後ろにいた篠ノ之箒に目を向けた。

「まあ、有り体に言つてしまえば、お前の置かれている状況を良く理解できておらず、先程の愚か者との試合でようやく知ったといった所だな」

「にやるほどく．．．え、何でこの子が責任感じてんの？」

「さあ？見返りもなしにISを作つて貰つたり、技術や勉強を教えてくれた人間に恩義を感じない馬鹿者なのだろうか、一夏は？」

「あー、申し訳ない」

取り敢えずとつと一夏を慰めんかあ！と視線が飛んできそうなので、右手でその背中を抱き、安心させるために頭を撫で始めた。

視線といえ、簪と本音のジト目も突き刺さっている。その後ろからは上手く感情を制御しきれていないのかよく分からない視線も一つほど。

この訳の分からない状況は、次の試合をどうするのかを聞きに来たセシリア・オルコットがアホな声を上げるまで続いた。